

中原遺跡第 9 次発掘調査報告書

2022

掛川市



調査区全景

例 言

- 1 本書は静岡県掛川市高田・吉岡地内における、中原遺跡第9次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は㈱サカタのタネ掛川総合研究センター研修施設建設に伴う緊急調査で、事業者の依頼を受けた掛川市が実施した。調査にかかわる費用は、㈱サカタのタネが負担している。
- 3 発掘調査は、令和2年度に現地調査及び基礎整理事業を実施し、令和3年度に本整理調査を行った。掛川市の指示のもと、現地調査及び基礎整理事業は「令和2年度 発掘調査事業 中原遺跡発掘調査業務」、本整理調査は「令和3年度 発掘調査事業 中原遺跡整理調査業務」として、いずれも株式会社フジヤマが実施した。調査期間、調査面積、調査体制は以下のとおりである。

[現地調査及び基礎整理事業]

調査期間：令和2年11月27日～令和3年3月12日

調査面積：1360㎡

調査担当：株式会社フジヤマ都市・地域創造部文化財研究室 辰巳 均

村田 弘之

測量技師：株式会社フジヤマ空間情報部空間計測室 秋田 幸宏

調査指導：掛川市協働環境部文化・スポーツ振興課 井村 広巳

夏目不比等

[本整理調査]

調査期間：令和3年7月12日～令和4年2月28日

調査担当：株式会社フジヤマ都市・地域創造部文化財研究室 村田 弘之

調査指導：掛川市協働環境部文化・スポーツ振興課 夏目不比等

- 4 発掘調査にあたっては、株式会社サカタのタネ及び近隣住民の方々から埋蔵文化財に対する多大なるご理解とご協力をいただいた。
- 5 発掘作業及び報告書作成にあたっては、以下の方々の参加を得た。(五十音順、敬称略)
[発掘作業] 北島秀雄 斎藤昭 原田静雄 深田重男 山崎シズ 山崎行弘
[整理事業] 奥野加織 豊田七重 野中照子 原田和子 藤田優子
- 6 現地調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々からご教示、ご協力を頂いた。
渋谷昌彦 鈴木敏則 平野吾郎 増子康真 松本一男(五十音順、敬称略)
- 7 本書の編集は村田弘之が行った。また執筆についてはⅠを夏目不比等が担当し、Ⅱ～Ⅴを村田弘之が担当した。
- 8 調査によって得た資料は、すべて掛川市協働環境部文化・スポーツ振興課が保管している。

凡 例

- 1 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は座標北(G.N)である。座標は世界測地系第Ⅷ系を用いた。
- 2 本書で使用した遺構表記は、以下の意味である。
SB：竪穴状遺構 SK：土坑 SP：小穴 SX：性格不明遺構
- 3 本書に用いる土層及び遺物の色調表記については、「新版標準土色帖(小山・竹原2006)」に拠っている。
- 4 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真図版の番号は一致する。

目 次

例言	i
凡例	i
目次	ii
I 調査に至る経緯	1
II 地理的・歴史的環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	3
III 調査の方法と経過	
1 調査の方法と経過	5
2 基本層序	6
IV 調査成果	
1 遺構	
(1) 竪穴状遺構	11
(2) 土坑	14
(3) 小穴	16
(4) 性格不明遺構	16
2 遺物	
(1) 土器	17
(2) 石器	25
V まとめ	
1 遺物について	29
2 遺構について	29
3 本調査地点の位置付け	29
4 おわりに	30
引用参考文献	30

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	中原遺跡周辺地形図	2
第3図	周辺遺跡分布図	4
第4図	土層柱状図	6
第5図	遺構全体図	7
第6図	SB01 平面・断面図	11
第7図	SB01 遺物出土状況図	12
第8図	SB02 平面・断面図	13
第9図	SB02 遺物出土状況図	14
第10図	土坑断面図	15
第11図	SP60 断面図	16
第12図	SB01 出土土器(1)	19
第13図	SB01 出土土器(2)	20
第14図	SB01 出土土器(3)	22
第15図	SB02・SP60・SX02・遺構外出土土器	23
第16図	出土石器	25

挿表目次

第1表	土坑計測表	14
第2表	小穴計測表	16
第3表	土器観察表(1)	26
第4表	土器観察表(2)	27
第5表	土器観察表(3)	28
第6表	石器属性表	28

図版目次

- 巻頭図版 調査区全景
- 写真図版 1 完掘状況 1
完掘状況 2
- 写真図版 2 完掘状況 3
完掘状況 4
- 写真図版 3 調査前風景（南から）
基本層序（調査区西壁）
- 写真図版 4 SB01 検出状況（南西から）
SB01 土層断面（西から）
- 写真図版 5 SB01 土層断面（北から）
SB01 遺物出土状況（北西から）
- 写真図版 6 SB01 遺物 No. 1 及び 2 出土状況（北西から）
SB01 遺物 No. 3 出土状況（西から）
- 写真図版 7 SB01 遺物 No. 3 及び 35 出土状況（西から）
SB01 完掘状況（北西から）
- 写真図版 8 SB02 検出状況（南東から）
SB02 土層断面（南から）
- 写真図版 9 SB02 土層断面（西から）
SB02 遺物出土状況（東から）
- 写真図版 10 SB02 遺物出土状況（北西から）
SB02 完掘状況（東から）
- 写真図版 11 出土遺物（1）
- 写真図版 12 出土遺物（2）
- 写真図版 13 出土遺物（3）
- 写真図版 14 出土遺物（4）

I 調査に至る経緯

平成 31 年 4 月に掛川市吉岡・高田地内に所在する、(株)サカタのタネ掛川総合研究センターの研修施設建設計画に伴い、埋蔵文化財の取り扱いについて相談が寄せられた。

(株)サカタのタネ掛川総合研究センターの敷地の大半は周知の埋蔵文化財包蔵地内に所在しており、研修施設建設計画地は中原遺跡の範囲内であった。

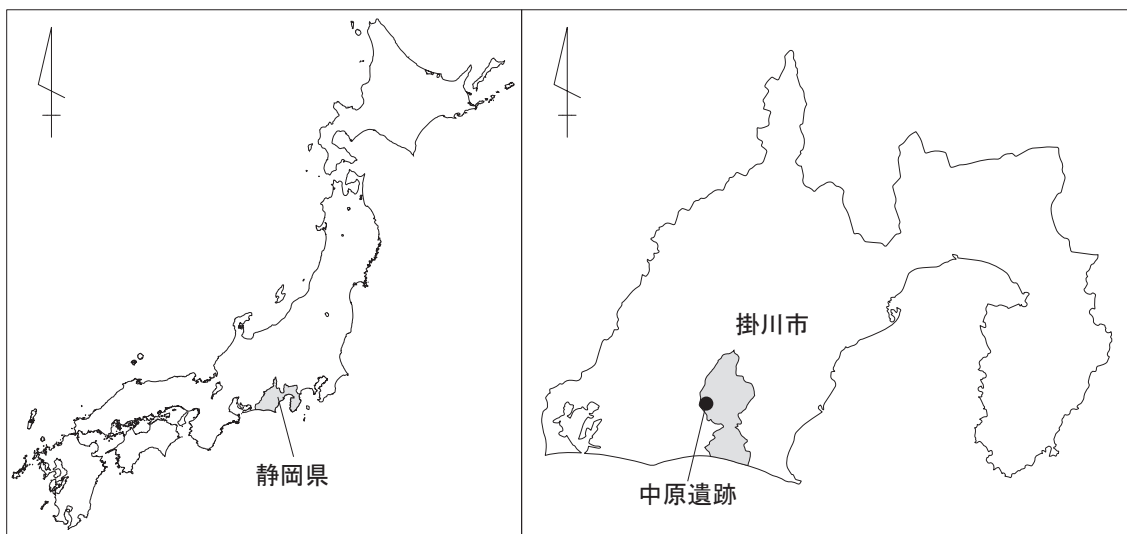
中原遺跡は縄文時代中期(約 5,000 年前)の遺跡で、過去の調査では竪穴住居跡や小穴、土器、石器などが発見されており、その時代の集落が営まれていたことが明らかになっている。計画地における遺跡の状況を把握するため、確認調査を実施した。

確認調査は、令和元年 8 月 19、20 日の 2 日間をかけて実施した。幅 1 m で、東西方向に長さ 37 m、33 m、33 m のトレンチ(試掘溝)を 3 本設定し、遺構検出面まで掘削した。縄文時代の竪穴住居跡や小穴、土器が地表下 55 ～ 65cm の深さから検出され、地下に遺構が存在することが確認となった。

(株)サカタのタネと協議の結果、研修施設建設による埋蔵文化財への影響は避けられないことから、記録保存のための発掘調査を実施することとした。確認調査の結果から、計画範囲の東寄りには遺構が存在しないことが明らかにされ、また、南側の駐車場計画地では掘削が行われず遺構が保存されるため、計画地北西寄りの 1,360㎡を調査対象とした。

令和 2 年 9 月 30 日付けで (株)サカタのタネと掛川市との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結した。

令和 2 年 10 月 16 日付けで(株)サカタのタネから提出された「埋蔵文化財発掘の届け出書」を、記録保存のための本発掘調査が適当との副申をつけ、令和 2 年 11 月 6 日付けで掛川市から静岡県へ進達した。

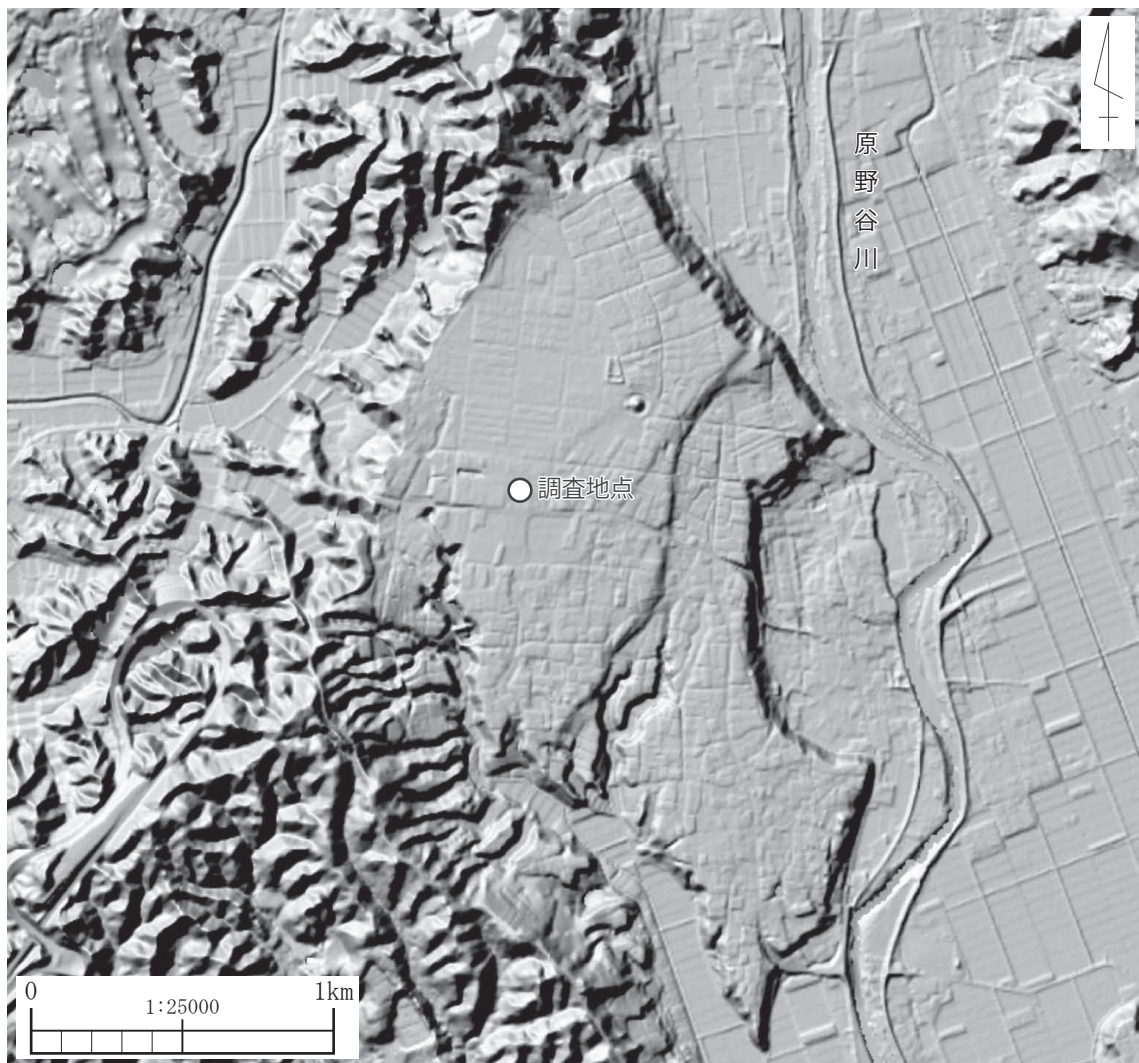


第 1 図 遺跡の位置

Ⅱ 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

中原遺跡は掛川市高田・吉岡に所在する。遺跡は、袋井市との市境を流れる原野谷川中流域に形成された河岸段丘上に立地している。原野谷川は本市最高峰の八高山を源流とし、市内を南流し、袋井市愛野で逆川と合流し、袋井市と磐田市の市境で太田川に合流する。この原野谷川流域には多くの河岸段丘が形成されており、段丘面上には数多くの遺跡が残されている。これらの河岸段丘の中でも、遺跡が立地する和田岡地区周辺は最も大きな規模を誇る段丘面である。この段丘面は大きく二つに分けられ、遺跡がある上位段丘面は、南北に約 1.7km、東西は最も広い所で約 800m を測る。標高は、北端で約 66m、南端で約 52m と南北で約 14m の高低差を有する。下位段丘面は南北に約 1.8km、東西は最も広い所で約 650m を測る。標高は北端で約 55m、南端で約 40m を測る。



第 2 図 中原遺跡周辺地形図

2 歴史的環境

ここでは和田岡地区周辺の縄文時代とその前後における歴史環境について概観する。

本地域において発掘調査によって検出された人類最古の痕跡は、溝ノ口遺跡（第3図227）、瀬戸山Ⅱ遺跡（第3図236）、高田上ノ段遺跡（第3図230）で発見された旧石器時代のスクレイパーである。いずれの遺跡においても、まとまった資料として発見されていないため、当該期における人間活動の詳細については不明な点が多い。

縄文時代になると、本地域における人間活動はより活発になり、発見された遺跡も増加する。縄文時代の最も古い遺跡は縄文時代早期（今から約10,000年前）の押型文土器が発見された瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡（第3図235・236）、高田遺跡（第3図243）である。瀬戸山Ⅰ遺跡で発見された押型文土器は小穴より出土したものであるが、住居跡等の遺構は伴っていない。

日本列島全域で遺跡数が増大する縄文時代中期には、本地域においても発見される遺跡数が増える。前述の遺跡に加え、中原遺跡（第3図228）、吉岡下ノ段遺跡（第3図232）、吉岡原遺跡（第3図234）、今坂遺跡（第3図444）、女高Ⅰ遺跡（第3図244）など、和田岡地区の広い範囲で土器が出土している。中原遺跡、高田遺跡、今坂遺跡、瀬戸山Ⅰ遺跡では石囲い炉を伴う竪穴住居跡が発見されるなど、当時の人々の生活の詳細が着実に明らかになってきている。

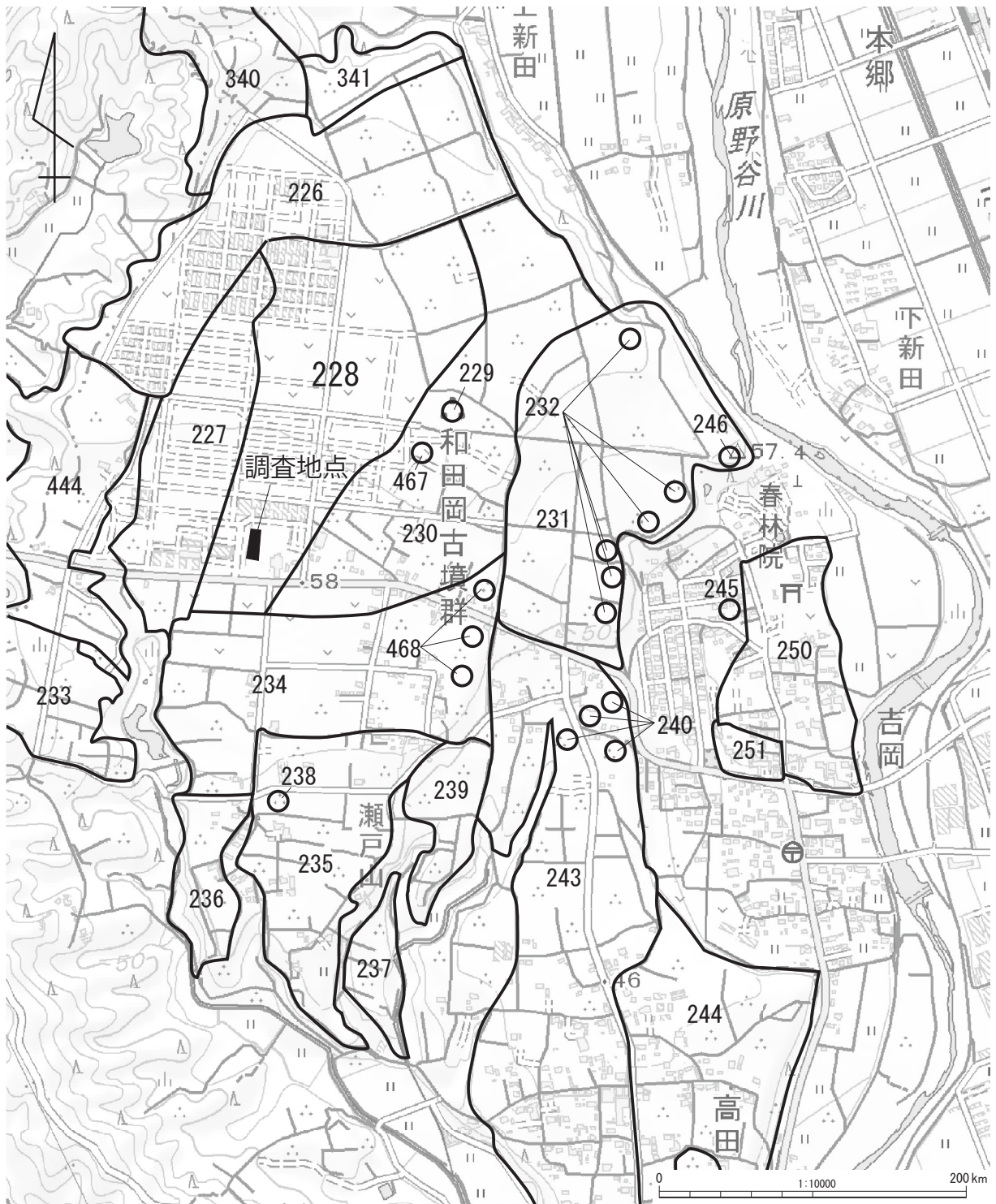
縄文時代後期は、瀬戸山Ⅰ遺跡で石敷き遺構を伴う竪穴住居跡が検出されている。また吉岡下ノ段遺跡からは縄文時代晩期の土器が出土している。しかしながら後晩期は、中期から一転して遺跡数やその規模が減少する。このことから、後期以降、この地における人間活動は若干希薄になった可能性が考えられる。

弥生時代に入ると中期に比定される竪穴住居跡と方形周溝墓が女高Ⅰ遺跡で発見されているほか、今坂遺跡では土器棺墓が発見されている。

弥生時代後期から古墳時代前期は和田岡原における遺跡数が爆発的に増加する。発見された遺構のほとんどは、竪穴住居跡や掘立柱建物跡で、当該時期に大規模な集落が営まれていたことがうかがえる。

古墳時代中期になると土地利用の在り方は一変し、全長66mの前方後円墳である各和金塚古墳をはじめとした和田岡古墳群のほか、段丘の縁辺部に小規模古墳が造営される。一方で、集落の発見例は少なく、古墳を造営した集団の動向は明らかになっていない。

和田岡地区周辺の縄文時代前後の歴史的環境について概観したが、見晴らしがよく、地盤が安定した上位段丘面という、遺跡立地に適した土地であることを鑑みると、縄文時代以前の遺跡や遺物の出土事例は必ずしも多いとはいえない。これは当然、全域が詳細に調査されているわけではないことにも起因するが、遺跡立地に適しているがゆえに、弥生時代以降もこの地において人類活動が繰り返されたことにより、縄文時代以前の遺跡が残されていないものと考えられる。



- | | | | |
|-----------------|------------|-------------|-------------|
| 226.東原遺跡 | 233.大向遺跡 | 240.藤六古墳群 | 340.西山城 |
| 227.溝ノ口遺跡 | 234.吉岡原遺跡 | 243.高田遺跡 | 341.城ノ腰遺跡 |
| 228.中原遺跡 | 235.瀬戸山Ⅰ遺跡 | 244.女高Ⅰ遺跡 | 444.今坂遺跡 |
| 229.吉岡大塚古墳 | 236.瀬戸山Ⅱ遺跡 | 245.宮脇行人塚古墳 | 467.高田上ノ段古墳 |
| 230.高田上ノ段遺跡 | 237.瀬戸山Ⅲ遺跡 | 246.春林院古墳 | 468.吉岡原古墳群 |
| 231.吉岡下ノ段古墳群 | 238.瀬戸山古墳 | 250.林遺跡 | |
| 232.吉岡下ノ段遺跡 | 239.花ノ腰遺跡 | 251.西村遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布図

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法と経過

調査は、5 m×5 mのグリッドを平面直角座標系の方眼に合わせて設定し、遺物の取り上げ及び実測の基準とした。グリッド名称は世界測地系第Ⅷ系に基づく国家座標X = -113,440、Y = 50,915の座標点を基点として、東から西に向かってアルファベットの昇順、北から南に向かって0から始まる数字の昇順で表し、交点をA0区等と呼称し、北東に位置する交点にグリッドを代表させた。

遺構全体図はトータルステーションで測量したデータをCADソフトで編集し作成した。遺構の個別平面図、遺物出土状況図、土層断面図は、手実測と器械実測を併用して作成した。なお遺構全体図は100分の1、遺構の個別平面図を20分の1及び10分の1、遺構平面微細図を10分の1とした。

出土遺物は可能な限り出土位置を記録し、小片の場合はグリッドないし層位別の一括取り上げを行った。

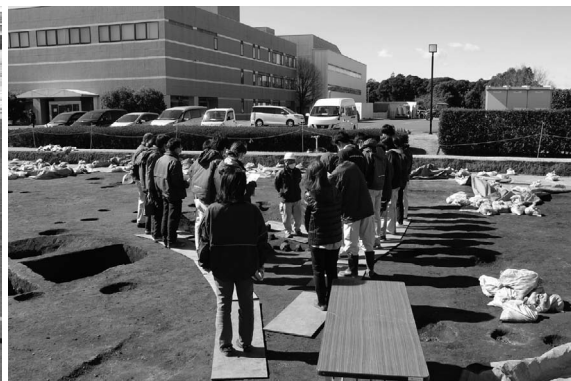
写真撮影はデジタル一眼レフカメラを主に使用し、一部フィルム写真（中判カラーリバーサルフィルム、中判白黒フィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、35mm白黒フィルム）を撮影した。

調査の経過は以下のとおりである。

11月27日	調査区の設定	1月14日	遺構検出状況の写真撮影
12月1日	重機による芝生除去開始	1月28日	第2回工程会議
12月2日	重機による表土除去開始	2月8日	現地説明会((株)サカタのタネ向け)
12月4日	基準点測量	2月9日	現地説明会((株)サカタのタネ向け)
12月8日	遺構検出開始	2月10日	有識者による現地視察・遺構 の写真測量
12月10日	重機による表土除去完了	2月19日	測量
12月14日	基準杭の設置	2月25日	空中写真撮影・現地撤収完了
12月21日	第1回工程会議		



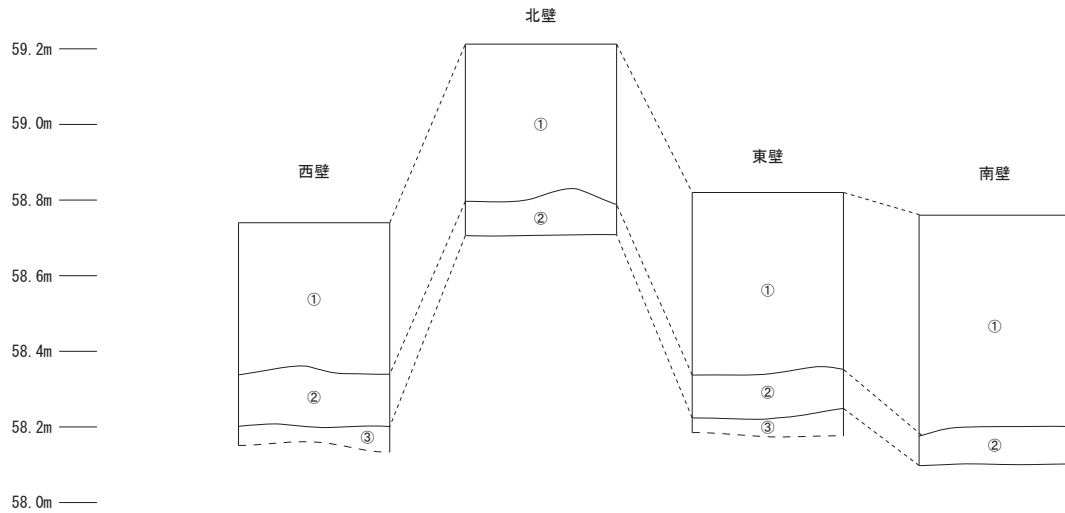
発掘作業風景



現地説明会の様子

2 基本層序

中原遺跡の立地については、「地理的環境」でも述べたとおり段丘面上である。今回調査を実施した地点では現地表下約 70cm までの土層を確認した。以下に調査区壁面の土層柱状図（第 4 図）を示し、各土層について記述する。



第 4 図 土層柱状図

①層

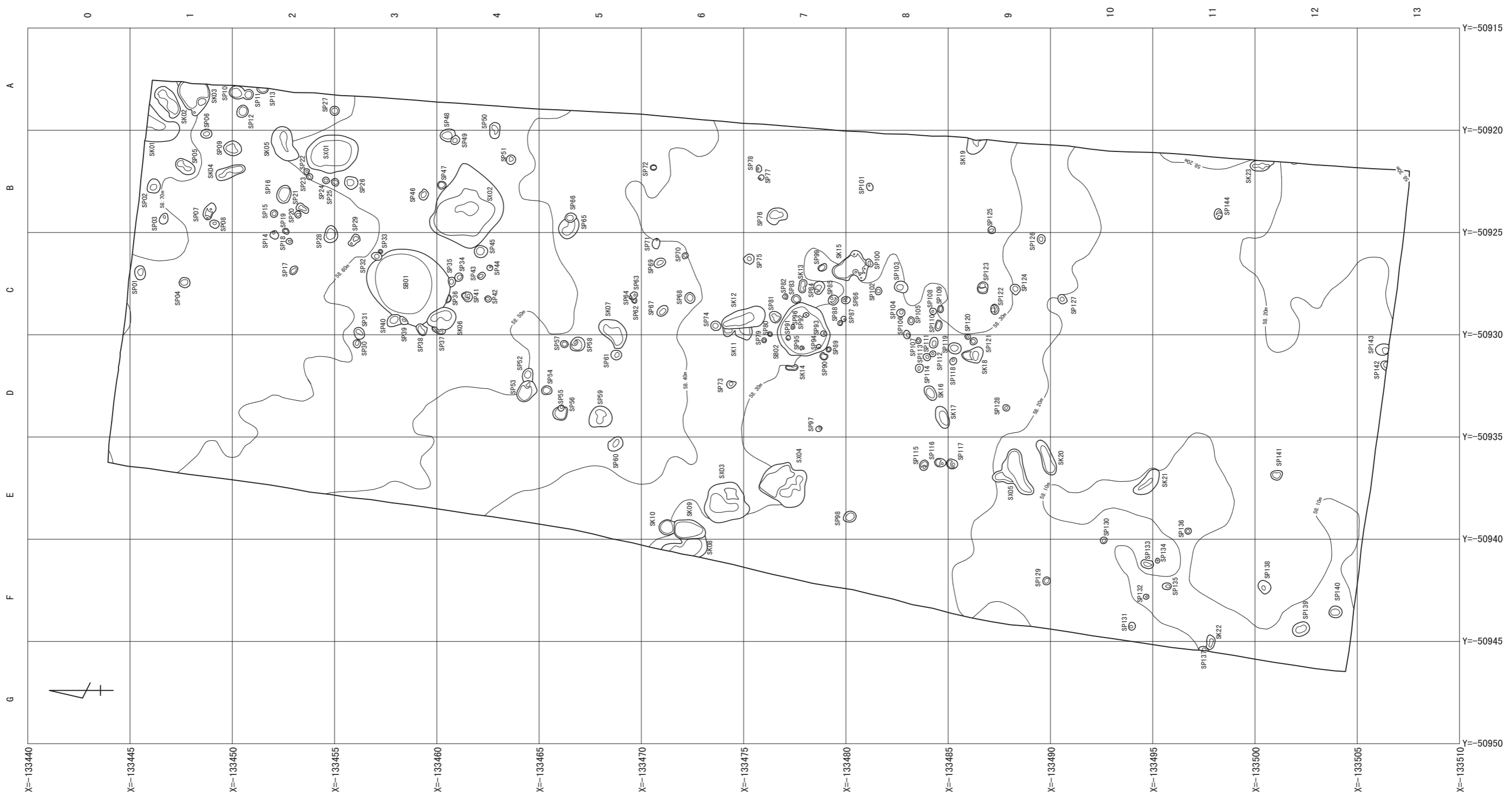
現代の盛土で層厚は約 40cm。

②層

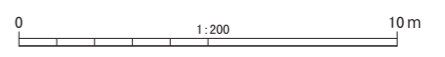
褐色（10YR4/4）シルト。層厚約 20cm。調査区全体に認められる①層と③層の漸移層。遺物包含層である。北から南にかけて極めて緩やかではあるが傾斜している。

③層

褐色（10YR4/4）シルト質粘土。粘性・しまり共に強い。直径 30mm 程度の礫を含む、段丘堆積層である。本調査における遺構検出面である。②層と同様に北から南にかけてわずかに傾斜している。



第5図 遺構全体図



IV 調査成果

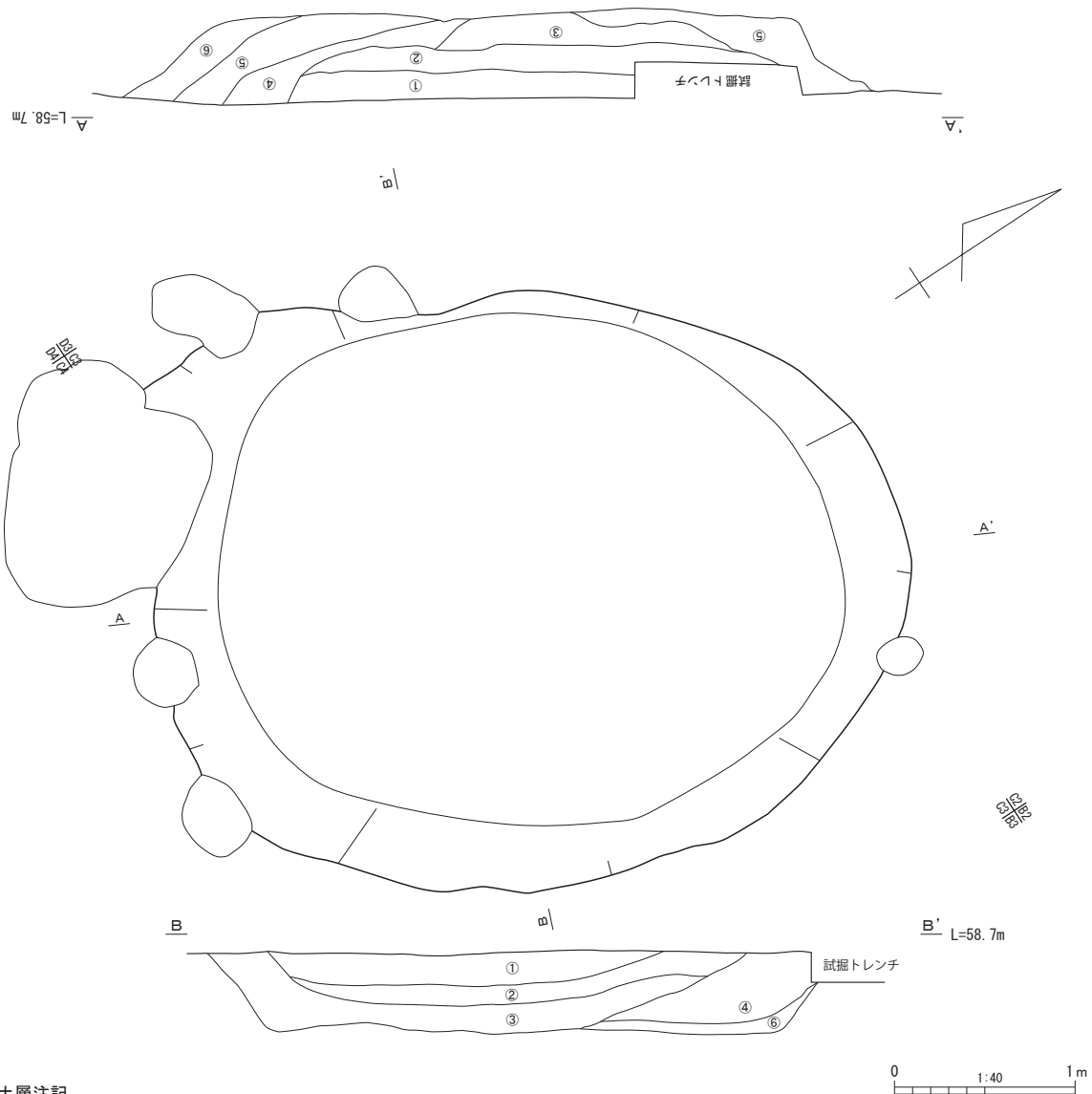
1 遺構

今回の調査では、竪穴状遺構2基、土坑23基、小穴144基（内、竪穴状遺構に伴うと考えられるもの4基）、性格不明遺構5基が検出された（第5図）。

(1) 竪穴状遺構

SB01（第6・7図）

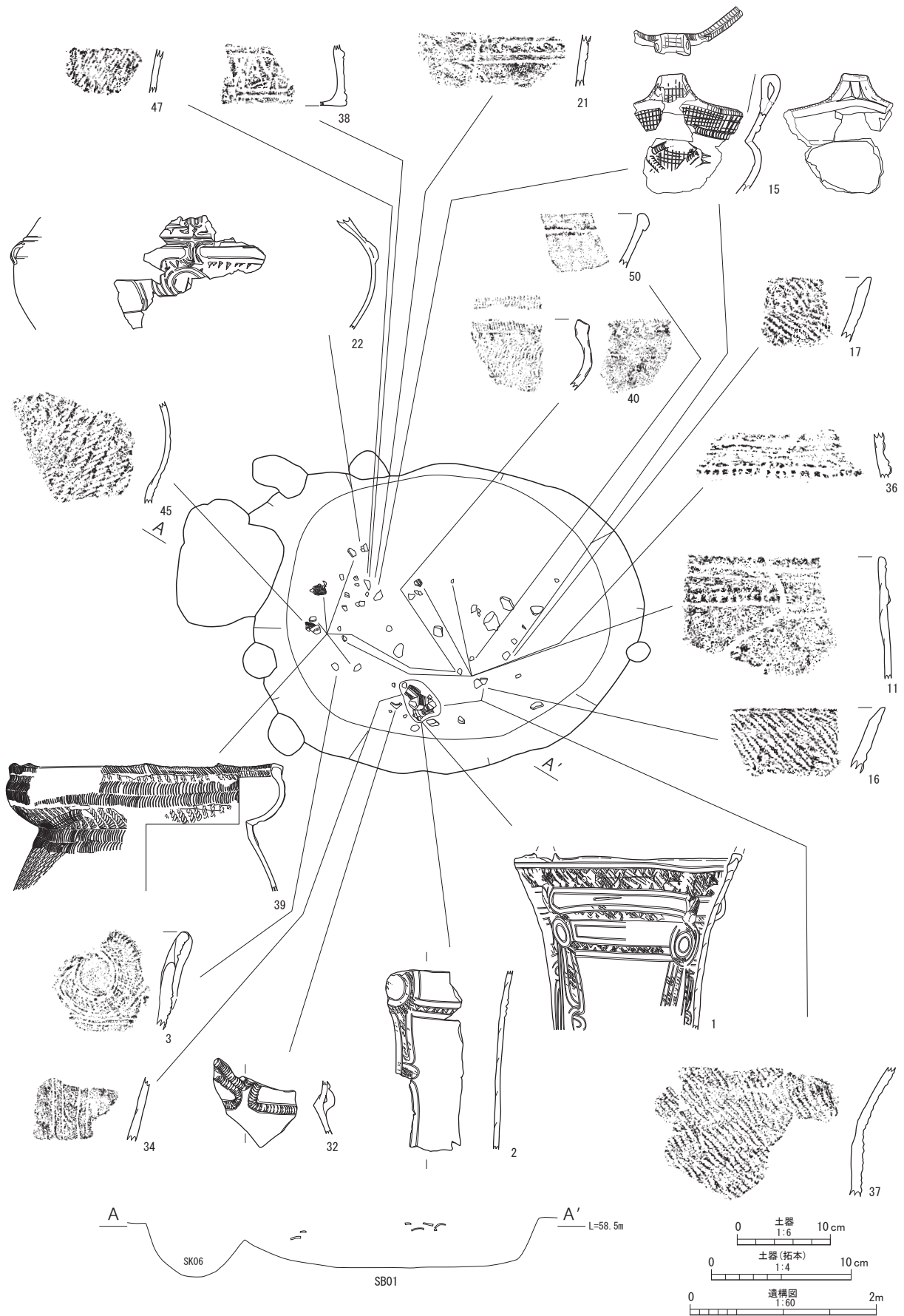
調査区北側、C3・4区に位置する。南北約4.2m、東西約3.2mを測り、楕円形を呈



土層注記

- ① 黒褐色 (10YR3/1) シルト 粘性あり しまり弱 植物根あり φ~2cm程度の凝灰岩粒を含む 遺物あり
- ② 黒色 (10YR2/1) シルト 粘性あり しまり弱 植物根あり φ~2cm程度の凝灰岩粒を含む 遺物あり
- ③ 黒色 (10YR1.7/1) シルト 粘性あり しまり弱 植物根わずかにあり φ~1cm程度の凝灰岩粒を含む 遺物あり 炭化物を多く含む
- ④ 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土 粘性強 しまりあり 植物根わずかにあり φ~4cm程度の凝灰岩礫を多く含む 遺物あり 炭化物わずかに含む
- ⑤ 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性あり しまり弱い φ~4cm凝灰岩粒を含む 炭化物を含む 遺物あり
- ⑥ 褐色 (10YR4/4) 粘土 粘性・しまりともに強い 植物根ごくわずかに含む φ~5cm程度の凝灰岩を含む

第6図 SB01 平面・断面図



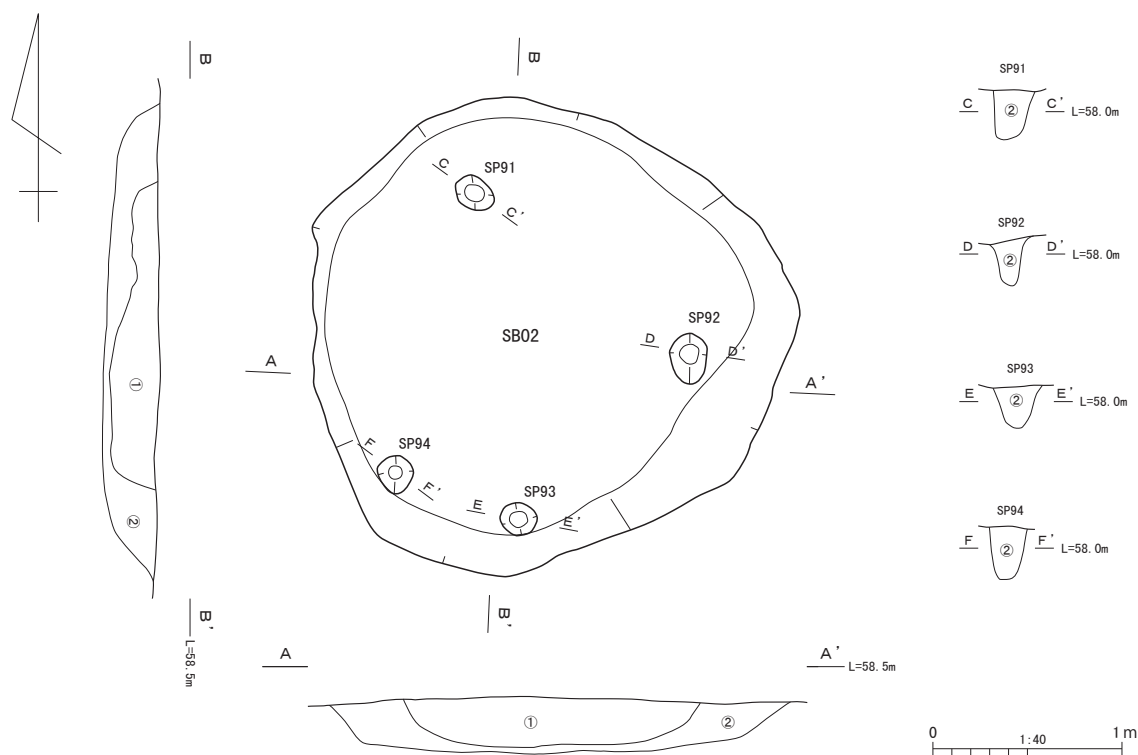
第7図 SB01 遺物出土状況図

する。検出面からの深さは約 45cm で、壁面は底面から緩く傾斜して立ち上がっている。昭和 58 年度の調査で検出された竪穴住居跡とは異なり、底面は貼床が施されず、炉跡や柱穴も検出されなかった。平面的な規模から考えると、竪穴住居跡の可能性は十分考えられるが、一方で炉跡や柱穴といった住居跡と推定しうる遺構が検出されなかったため、竪穴状遺構とした。覆土は 6 層に分層したが、遺物はいずれの層からも出土しており、層間での偏りは認められなかった。

SB02 (第 8・9 図)

調査区中央部、C 7・D 7 区に位置する。遺構の規模は南北・東西ともに約 2.5m の不整形円形を呈する。検出面からの深さは約 30cm で、壁面は SB01 同様に底面から緩く傾斜して立ち上がる。貼床は施されておらず、炉跡も検出されなかったが、柱穴と考えられる小穴が 4 基検出された (SP91 ~ 94)。柱穴の竪穴状遺構底面からの深さは SP91 が約 26cm、SP92 が約 24cm、SP93 が約 22cm、SP94 が約 28cm を測る。

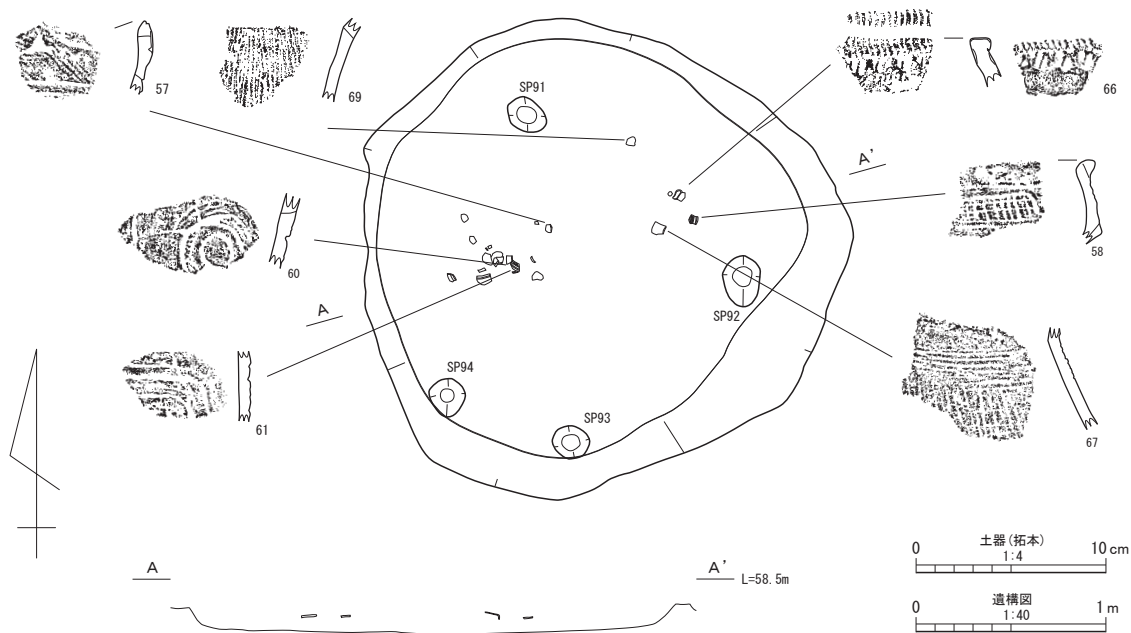
SB02 の覆土は 2 つに分層したが、遺物はどちらの層からも出土した。柱穴の覆土はいずれも SB02 の覆土②と同一である。



土層注記

- ① 10YR3/1 黒褐色シルト層 粘性弱 しまり弱 φ~3cm程度の礫を含む 土器を含む 炭化物含む 植物根含む
- ② 10YR3/3 暗褐色シルト層 粘性あり しまりあり 炭化物粒含む

第 8 図 SB02 平面・断面図



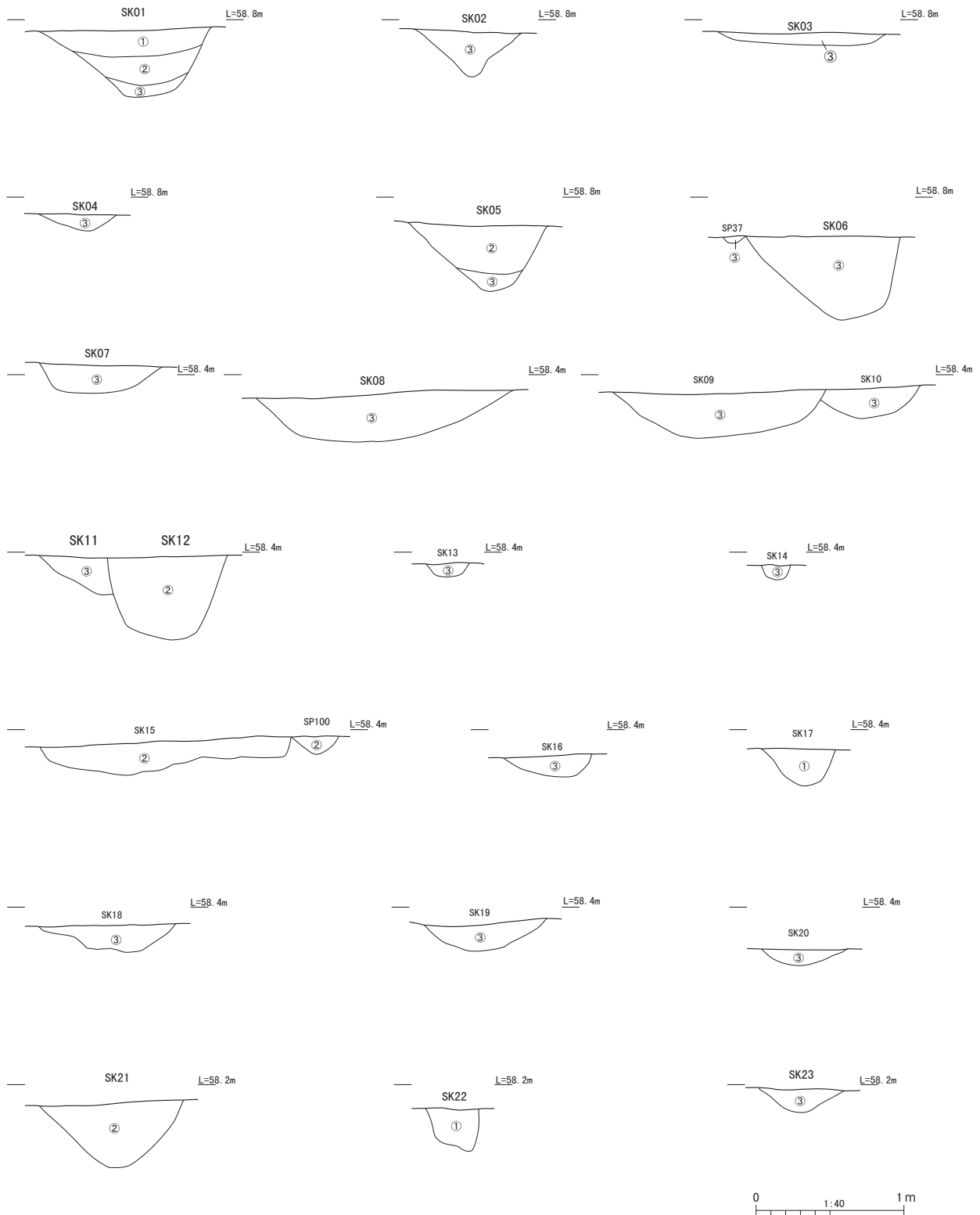
第9図 SB02 遺物出土状況図

(2) 土坑 (第1表、第10図)

平面形状の規模が比較的小さな堀込について、最大長が50cm以上のものを土坑、50cm未満のものを小穴と便宜的に分類した。本調査で検出された土坑は23基である。各土坑の規模については第1表に示した。いずれの土坑からも遺物は出土しなかったため、各土坑の帰属時期やその性格など詳細については不明である。

第1表 土坑計測表

遺構名	最大長 (cm)	深さ (cm)	備考	遺構名	最大長 (cm)	深さ (cm)	備考
SK01	116.0	44.00		SK13	29.0	8.00	
SK02	72.0	30.00		SK14	20.0	10.00	
SK03	114.0	9.00		SK15	170.0	20.00	SP100と重複
SK04	52.0	11.00		SK16	60.0	14.00	
SK05	94.0	44.00		SK17	49.0	24.00	
SK06	104.0	56.00	SP37と重複	SK18	92.0	18.00	
SK07	82.0	18.00		SK19	83.0	18.00	
SK08	174.0	32.00		SK20	58.0	10.00	
SK09	144.0	30.00	SK10と重複	SK21	97.0	44.00	
SK10	64.0	20.00	SK09と重複	SK22	36.0	38.00	
SK11	48.0	24.00	SK12と重複	SK23	58.0	16.00	
SK12	82.0	56.00	SK11と重複				



- ① 黒褐色 (10YR2/2) シルト 粘性あり しまり弱 植物根わずかに含む φ~5cmの凝灰岩を含む
- ② 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性あり しまり弱 植物根わずかに含む 上下位の土壌をブロック状に含む
- ③ 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 粘性あり しまり弱 植物根わずかに含む φ~5cm凝灰岩を含む

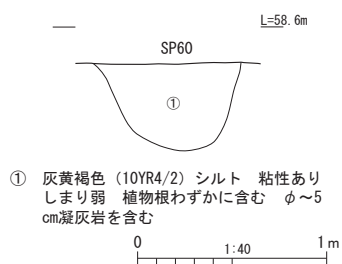
第 10 図 土坑断面図

(3) 小穴 (第2表)

検出した小穴は 144 基で、内、SP91～94 については SB02 の柱穴と考えられる。各小穴の規模については第 2 表に示した。遺物が出土したのは SP60 のみである。

SP60 (第 11 図)

調査区中央、E 5 区に位置する。長軸約 78cm、短軸約 57.5cm の不整円形を呈する。検出面からの深さは約 46cm で、断面形状は U 字形を呈する。縄文土器が 1 点出土した。



第 11 図 SP60 断面図

第 2 表 小穴計測表

遺構名	最大長 (cm)	深さ (cm)	遺構名	最大長 (cm)	深さ (cm)	遺構名	最大長 (cm)	深さ (cm)	遺構名	最大長 (cm)	深さ (cm)
SP1	61.00	22.00	SP37	14.00	4.00	SP73	31.00	30.00	SP109	27.00	8.00
SP2	61.00	16.00	SP38	42.00	10.00	SP74	42.00	14.00	SP110	48.00	9.00
SP3	49.00	30.00	SP39	38.00	10.00	SP75	45.00	18.00	SP111	48.00	23.00
SP4	43.00	12.00	SP40	47.00	20.00	SP76	73.00	17.00	SP112	27.00	8.00
SP5	58.00	22.00	SP41	49.00	26.00	SP77	22.00	12.00	SP113	32.00	10.00
SP6	40.00	14.00	SP42	26.00	18.00	SP78	31.00	11.00	SP114	37.00	10.00
SP7	76.00	32.00	SP43	31.00	14.00	SP79	22.00	22.00	SP115	46.00	14.00
SP8	35.00	46.00	SP44	24.00	44.00	SP80	20.00	8.00	SP116	44.00	38.00
SP9	64.00	14.00	SP45	52.00	18.00	SP81	46.00	17.00	SP117	54.00	26.00
SP10	57.00	12.00	SP46	48.00	16.00	SP82	24.00	16.00	SP118	32.00	42.00
SP11	44.00	8.00	SP47	34.00	8.00	SP83	41.00	12.00	SP119	50.00	16.00
SP12	54.00	10.00	SP48	60.00	22.00	SP84	58.00	30.00	SP120	30.00	16.00
SP13	48.00	50.00	SP49	36.00	16.00	SP85	42.00	32.00	SP121	30.00	14.00
SP14	40.00	38.00	SP50	42.00	28.00	SP86	37.00	28.00	SP122	34.00	12.00
SP15	40.00	12.00	SP51	42.00	20.00	SP87	20.00	16.00	SP123	49.00	20.00
SP16	90.00	12.00	SP52	57.00	34.00	SP88	23.00	8.00	SP124	47.00	18.00
SP17	42.00	16.00	SP53	94.00	39.00	SP89	23.00	28.00	SP125	30.00	25.00
SP18	26.00	24.00	SP54	37.00	16.00	SP90	10.00	13.00	SP126	40.00	22.00
SP19	28.00	12.00	SP55	26.00	44.00	SP91	22.00	26.00	SP127	41.00	18.00
SP20	36.00	16.00	SP56	40.00	18.00	SP92	24.00	24.00	SP128	28.00	16.00
SP21	30.00	20.00	SP57	30.00	8.00	SP93	26.00	22.00	SP129	35.00	12.00
SP22	28.00	12.00	SP58	60.00	41.00	SP94	20.00	28.00	SP130	29.00	11.00
SP23	48.00	12.00	SP59	88.00	36.00	SP95	20.00	8.00	SP131	35.00	30.00
SP24	30.00	8.00	SP60	78.00	46.00	SP96	22.00	6.00	SP132	22.00	13.00
SP25	38.00	12.00	SP61	41.00	38.00	SP97	28.00	11.00	SP133	34.00	12.00
SP26	62.00	18.00	SP62	22.00	8.00	SP98	48.00	16.00	SP134	22.00	10.00
SP27	46.00	8.00	SP63	28.00	27.00	SP99	31.00	8.00	SP135	30.00	15.00
SP28	82.00	12.00	SP64	12.00	16.00	SP100	32.00	12.00	SP136	27.00	14.00
SP29	64.00	18.00	SP65	75.00	20.00	SP101	33.00	20.00	SP137	45.00	16.00
SP30	36.00	22.00	SP66	41.00	30.00	SP102	34.00	14.00	SP138	58.00	32.00
SP31	51.00	24.00	SP67	61.00	14.00	SP103	46.00	16.00	SP139	62.00	18.00
SP32	32.00	14.00	SP68	53.00	16.00	SP104	34.00	19.00	SP140	50.00	19.00
SP33	16.00	14.00	SP69	44.00	16.00	SP105	34.00	10.00	SP141	42.00	12.00
SP34	38.00	14.00	SP70	28.00	12.00	SP106	36.00	18.00	SP142	42.00	16.00
SP35	35.00	11.00	SP71	51.00	48.00	SP107	26.00	20.00	SP143	46.00	38.00
SP36	28.00	9.00	SP72	26.00	11.00	SP108	29.00	11.00	SP144	53.00	30.00

(4) 性格不明遺構

検出した性格不明遺構は 5 基で、いずれも風倒木痕と考えられる。SX02 からは 35 点の土器が出土している。

2 遺物

(1) 土器

出土した土器は総数 792 点である。遺構別出土点数は、SB01 が 614 点、SB02 が 129 点、SP60 が 3 点、SP125 が 2 点、SX02 が 35 点、遺構外が 9 点である。すべて縄文時代中期に帰属すると考えられる。以下に遺構ごとに記述する。

SB01 (第 12 ～ 14 図)

1 ～ 38 は増子康眞氏が提唱する北裏 C I 式土器に属する土器群と考えられる (串原村教育委員会 2003、増子 2008)。1・2 は、同一個体の深鉢形土器である。胴下半から底部を除くが、残存状況は良好である。器形は円筒形を呈し、底部から口縁部にかけて緩やかに外反する。器厚は薄い。器面全面に半截竹管内側を使用した平行沈線が施されるが、口縁部付近と胴部では文様体の意図する方向が異なっている。口縁部直下には 3 条の平行沈線が横位に施され、上 2 条の平行沈線の間には、その後縄文を施文し、2 条の平行沈線の内側に沿って鋸歯状に、三角印刻が施されている。下 2 条の間には縄文は施されない (無文帯) が、2 条の平行沈線を結ぶ垂直方向の橋状把手を 3 対もつ。これより下位は平行沈線で方形の区画線文が施される。各把手の直下には平行沈線による環状文が施され、この円の間は横位に長い方形の区画線文が施される。また円の下位は縦位に長い方形の区画線文が施される。器厚はやや薄手で、堅緻な焼成である。色調は黒褐色で、胎土には長石、金雲母、白色微粒子が含まれる。3 は半円突起のある深鉢形土器の口縁部破片である。半截竹管による平行沈線が円形に 2 重に施され、二つの円の間には格子状に線刻が施される。また突起縁边上には連続爪形文が施されている。器厚はやや厚い。4 は深鉢形土器の口縁部破片である。半截竹管による平行沈線が 3 条、横方向に施され、それぞれの平行沈線の間には、その後縄文が施される。また下位 2 条の平行沈線間には、クサビ状印刻が横方向に連続して施されている。最上位の平行沈線が右側上方に上がっていくことから、波状口縁と考えられる。5 は口縁部破片で、緩やかに外傾する。器厚は薄い。口縁部及びその直下に、半截竹管による平行沈線が横位に 3 条施され、上位 2 条と下位 2 条の間には縄文が施文される。上から 2 条目の平行沈線の下端にクサビ状印刻が、横位に連続的に施される。6 は口縁部破片でキャリパー形の器形を呈し、胴部から緩やかに内湾し、端部付近で垂直に立ち上がる。7 は口縁部破片である。器厚はやや厚い。端部から半截竹管による平行沈線が 2 条横位に施されている。平行沈線間には縄文が施され、2 条目の平行沈線の上下端には三角印刻が横位に連続して施される。8 は緩やかに内湾する口縁部破片である。器厚は薄い。半截竹管による平行沈線が 2 条横位に施され、1 条目の平行沈線上下端には三角印刻が横位に連続して施される。胎土は砂質で、風化による摩耗が激しい。

9 は内傾する口縁部破片である。器厚は薄い。口縁端部に刻みが連続して施される。半截竹管による平行沈線が横位方向に 2 条施されている。10 は垂直に立ち上がる口縁部破片である。器形は円筒形を呈すると考えられる。端部は小波状につくられる。端部直下に半截竹管による平行沈線が 2 条横位に施され、平行沈線間には縄文が充填される。11 は

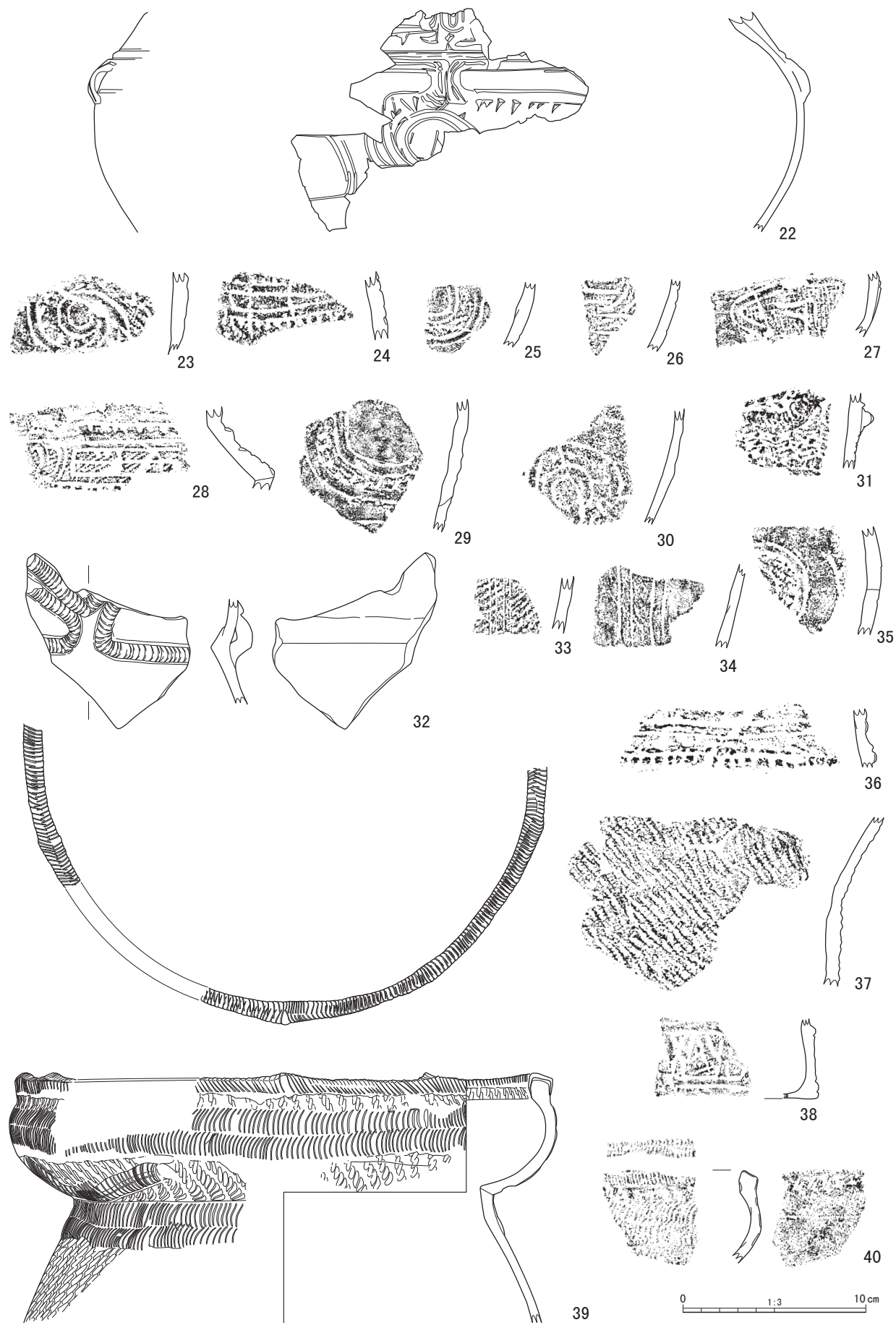
円筒形を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。器厚は薄い。口縁部直下に半截竹管による平行沈線が横位に施される、その下には半截竹管の押し引きによる連続爪形文が施されている。胎土は砂質で、風化による摩耗が激しい。12は口縁部破片である。内傾する口縁部が端部で外側に屈曲する。器厚は薄い。半截竹管による平行沈線が横位に1条施され、その上部に、半截竹管状工具の端部による刺突が連続的に施される。13は深鉢形土器の口縁部破片である。水平方向に施された2条の隆帯上に、半截竹管の押し引きによる連続爪形文が施され、その上に突起が作り出される。突起上には連続爪形文は認められない。14は口縁部破片で、胴部から緩やかに外傾したのち端部付近で垂直に立ち上がる。端部に刻みが施され、外面には縄文が施文されている。器厚は薄い。

15はキャリパー形の呈し、口縁部が外傾する小型の鉢形土器である。地文は櫛描きの格子文で、隆帯の上に半截竹管による押し引き文が施される。口縁に作られた波状把手の内面には三角印刻が横位に2つ施されている。16・17は深鉢形土器の口縁部破片である。外面全体に縄文が施される。18・19・20は深鉢形土器の胴部破片である。器厚は薄い。1の口縁部付近と同様に、半截竹管による平行沈線が横位方向に2条施された後、平行沈線間に縄文を施文し、その上下端に鋸歯状にクサビ状印刻が施されている。21は深鉢形土器の胴部破片である。半截竹管による平行沈線が横位方向に2条施され、下位の平行沈線には平行沈線による環状文が連結する。22は胴部破片で、器厚は薄い。破片上部には半截竹管による平行沈線で楕円形が描かれ、その左右には平行沈線が横位に施される。その下には半截竹管による平行沈線が2条横位に施され、2条の平行沈線を結ぶ橋状把手が造られる。把手には水平方向に区画するように、平行沈線が2条縦位に施されている。23は深鉢形土器の胴部破片である。半截竹管による平行沈線が渦巻き状に施される。平行沈線の間には、縄文が施され、平行沈線に平行して連続的な三角印刻が施される。器厚はやや厚い。24は深鉢形土器の胴部破片で、半截竹管による平行沈線で水平方向に長い方形の区画線文を施し、その外側に連続した押し引き刺突が施される。色調は赤褐色で、風化による表面の摩耗が著しい。胎土には長石、金雲母、黒雲母が含まれる。25は深鉢形土器の胴部破片である。器厚はやや厚い。半截竹管の平行沈線による2重の環状文が施され、平行沈線の間には半截竹管による押し引き刺突が施される。26は深鉢形土器の胴部破片で、半截竹管による4条の平行沈線が入り組むように施されている。器厚は薄い。

27はキャリパー形の器形を呈する深鉢形土器の胴部破片である。器厚は薄い。半截竹管による平行沈線で区画を施し、その内側を縦位に細い平行沈線が充填される。28は深鉢形土器の口縁部直下の破片である。器厚はやや厚手。肩部で、外側に折れ、口縁部に向けて立ち上がる器形を呈する。その屈折部に、半截竹管による平行沈線で水平方向に長い方形区画が施され、その内側に縄文が施文された後、区画を垂直方向に二分するように沈線が施される。方形の区画線文の上下には横方向に平行沈線が施されており、平行沈線に沿って半截竹管の刺突が施される。29は深鉢形土器の胴部破片である。器厚は薄い。半截竹管の平行沈線による2重の環状文が施され、平行沈線の間には半截竹管による押し引き刺突が施される。30は深鉢形土器の胴部破片である。口縁部に向かって僅かに内湾して



第 12 图 SB01 出土土器 (1)

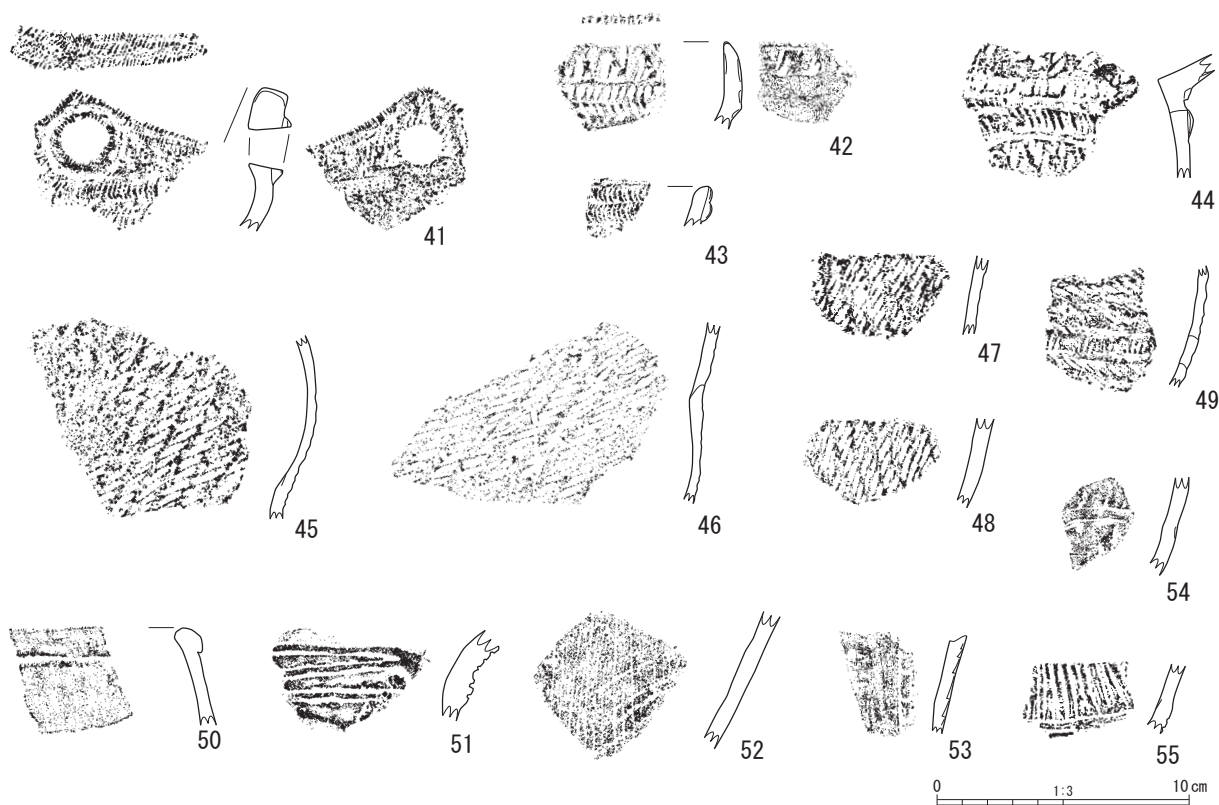


第13图 SB01 出土土器 (2)

いる。外面には半截竹管の平行沈線による3重の環状文が施され、内側をクサビ状の印刻が施されている。色調は赤褐色で、表面の風化による摩耗が著しい。器厚は薄い。31は深鉢形土器の胴部破片である。波状に施した刻みの上に隆帯を貼り付け、隆帯上に半截竹管による爪形文を施している。

32は深鉢形土器の胴部破片である。胴部の屈曲部に施された把手の外周に隆帯を貼り付け、隆帯上に半截竹管による押引き文が施される。器厚はやや厚い。33は縄文施文後に、半截竹管による平行沈線が縦位に2条施されているが、他の平行沈線に比べ、細く、浅い。器厚は薄い。34は胴部破片で、器厚は薄い。半截竹管による平行沈線が縦位に2条施されている。35は胴部破片で、半截竹管の平行沈線による2重の環状文が施される。平行沈線の間には縄文が充填される。器厚はやや厚い。36は胴部破片で、半截竹管による平行沈線が横位に1条施され、その下位には半截竹管の押引きによる連続爪形文が横位に施される。器厚は薄い。11と同一個体である可能性がある。37は深鉢形土器の胴部破片で、垂直方向に立ち上がる器壁が外傾する器形を呈する。器面全体に縄文が施されている。器厚は薄い。38は深鉢形土器の胴下半から底部にかけての破片である。半截竹管による平行沈線で区画を作り、その間には、ランダムに平行沈線が施されている。器厚は薄い。

39～49は鷹島式に比定される土器である(泉2008)。39～42・44～49のように、地文は、繊維質がみられない節が長大な縄文である。また39～44のように、地文である縄文の上に貼付された隆帯上に間隔の狭い連続爪形文が施される特徴を持つ。39はキャリパー形の器形を呈する深鉢形土器である。器厚は薄い。地文である縄文の上に水平方向に隆帯を貼り付け、連続爪形文を施すことを基本とするが、くびれ上方では波状に隆帯を貼り付け、連続爪形文を施している。また口縁端部には僅かに隆起する突起が作られている。口縁端部に内外両側から施されている連続爪形文の施文順序は内側と外側が交互に入れ替わるが、この突起がその起点となっている。40は39と同一個体の口縁部破片である。39と同様に地文の縄文の上に隆帯を横位に貼り付け、隆帯上に貝殻状工具の端部刺突による連続爪形文が2条施される。また口縁端部にも隆帯が貼り付けられ、口縁部外面側と内面側の両側から連続爪形文が2条重なるように施される。口縁部内面にも縄文が施文される。41は深鉢形土器の波状口縁部破片である。波状口縁の頂部直下に穴が開けられている。口唇部、口縁部に連続爪形文が施され、穴の縁辺にも隆帯を貼り付け、連続爪形刻みを施している。器厚は薄い。42は口縁部破片である。胴部から口縁部にかけて外反し、口縁部は直立する器形を呈する。器厚は薄い。外面は縄文を地文とし、口縁部下方に隆帯が横位に貼り付けられ、その上に貝殻状工具端部刺突による連続爪形文が2条施される。口縁端部には貝殻状工具の端部による刻みが連続的に施される。また内面には端部より2cm下方まで縄文が施文される。43は口縁部破片で、器厚は薄い。縄文を地文とし、端部直下に隆帯を横位に貼り付け、隆帯上に貝殻状工具端部刺突による連続爪形文を2条施している。44はキャリパー形深鉢の口縁部から胴部にかけて屈曲する部分の破片である。屈曲する角度は直角に近い。器厚は薄い。縄文を地文とし、屈曲部及びその下位に幅



第 14 図 SB01 出土土器 (3)

2 cm 程度の隆帯を横位に貼り付け、貝殻状工具の端部刺突による連続爪形文を 2 条施している。45～48 は深鉢形土器の胴部破片である。外面には、繊維質がみられない節が長大な縄文が施文される。器厚は 45～47 は薄く、48 はこれらと比してやや厚い。

49 は胴部破片である。器厚は極めて薄い。縄文を地文とし、横位に貼り付けられた隆帯上に貝殻端部の縦位刺突が連続的に施される。39～48 と比べ、縄文の節がやや小さく、隆帯上の施文工具や手順の特徴から、後続する船元 I 式に比定される可能性もある。

50～55 は北裏 C I 式及び鷹島式のどちらにも比定できない土器群である。

50 は内湾する口縁部破片で、折返し端部を持つ。縄文等は施されない。器厚はやや厚い。51 は胴部破片である。器厚は厚い。半截竹管による平行沈線が横位にランダムに施されている。北裏 C I 式に比定されている土器と比較して、平行沈線の幅は狭く、深さは深いため、異なる工具が用いられているものと考えられる。52 は胴部破片である。器厚は薄い。半截竹管による平行沈線がランダムに施されている。53 は胴部破片で、水平方向の湾曲の程度から、小型の鉢形土器と考えられる。半截竹管の押引きによる連続爪形文が縦位に施されている。54 は胴部破片である。器厚は薄い。半截竹管による浅い平行沈線が横位に施される。その上部に篋状工具による刺突が施されている。55 は胴部破片で、器厚はやや厚い。半截竹管による縦位の平行沈線を連続的に施し、その下部に平行沈線を横位に施している。

SB02 (第 15 図)

56 ~ 64 は北裏 C I 式に比定できる土器群である。56 は口縁部破片である。胴部から口縁部にかけて外反する箇所の外表面が剥離している。剥離した箇所を除く外面全体に縄文が施されている。57 は波状口縁の破片で、器厚はやや厚い。半截竹管による平行沈線が横位に 2 条施され、その間に縄文が充填される。波状頂部直下には三叉文が施され、その左右にはクサビ状の印刻が連続的に施されている。58 は口縁部破片である。胴部から口縁部にかけて内側に屈曲し、端部がわずかに外反する。半截竹管による平行沈線で、方



56 ~ 69 : SB02

70 : SP60
71 ~ 75 : SX02

76・77 : 遺構外

0 1:3 10cm

第 15 図 SB02・SP60・SX02・遺構外出土土器

形の区画文を横位に施している。区画内に沈線が格子状に施される。59は口縁部破片である。器厚は薄い。口縁内面に粘土紐が貼り付けられ、口唇部が肥大化する。端部には沈線が1条横位に施される。外面には半截竹管による平行沈線が横位に1条施され、その直下に平行沈線による方形の区画文が横位に施される。60は胴部破片で、器厚は薄い。半截竹管による平行沈線で2重の環状文を描く。平行沈線間には縄文が充填される。61・62は胴部破片で、器厚は薄い。半截竹管による平行沈線で方形の区画文が横位に施される。63は胴部破片で、器厚はやや厚い。半截竹管による平行沈線で楕円形の区画文が横位に施され、区画内に縄文が施文される。64は、胴部から口縁部にかけて屈曲する部分の破片である。屈曲部の外面に隆帯を貼り付け、半截竹管の押し引きによる連続爪形文を施している。

65・66は船元I式1期（泉1988）に比定される土器である。65・66は同一個体と考えられる口縁部破片である。端部及び口縁部外面に隆帯を横位に貼り付け、隆帯上に貝殻状工具の刺突による連続爪形文を施している。刺突間の距離はSB01から出土した鷹島式土器に比べ、やや広い。地文は縄文で、節は長大であるが、繊維痕が認められる。

67～69は北裏C I式と船元I式1期のどちらにも比定できない土器群である。67・68は口縁部直下の胴部破片である。器厚は薄い。内傾する胴部が明確に屈曲し、口縁部は垂直に立ち上がる。屈曲点直下に半截竹管による平行沈線が横位に3条ないし4条施され、その下位に半截竹管による平行沈線が格子状に施される。ただし上部の平行沈線と比べ、線の幅は細い。69は胴部破片で、器厚は薄い。外面全体に半截竹管による平行沈線が縦位に連続して施される。

SP60（第15図）

深鉢形土器の胴部と思われる破片が1点のみ出土している。地文は縄文である。

SX02（第15図）

71～75は同一個体の考えられる北裏C I式に比定される深鉢形土器である。半截竹管による平行沈線で区画線文を施し、区画内には縄文を施文し、また細い半截竹管による刺突が施される。

遺構外出土土器（第15図）

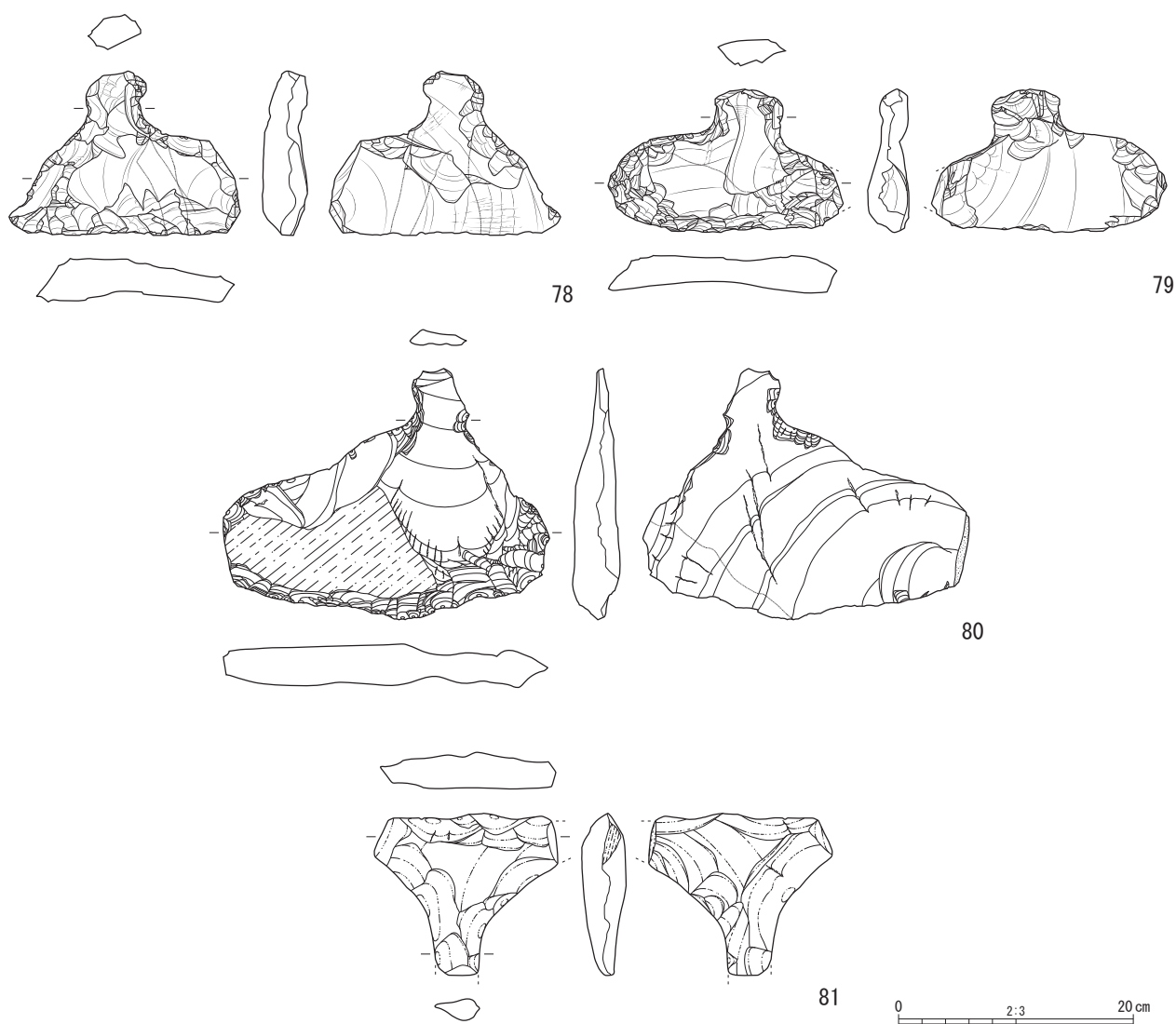
76は北裏C I式に比定される口縁部破片である。波状口縁で、口唇部に2条の連続爪形文を施し、その下位に無文帯、さらにその下に連続爪形文を施している。

77は口縁部破片である。内外面ともにキャタピラ文が施され、端部に刻みが施されている。

(2) 石器 (第 16 図)

出土した石器は総数 7 点で、いずれも SB01 より出土している。利器は石匙が 3 点、石錐が 1 点出土した。

78 は凝灰質頁岩製の石匙である。つまみ部の調整は細かい。背面にのみ微小剥離痕が認められることから、搔器としての機能が想定される。79 は凝灰岩製の石匙である。78 と同様につまみ部の調整は細かい。また微小剥離痕が背面にのみ認められることから、搔器としての機能が想定される。80 は凝灰岩製の石匙である。78・79 と比べ、調整は全体的に粗い。微小剥離痕が背面にのみ認められることから、搔器としての機能が想定される。81 は安山岩製の石錐である。機能部位は折損している。また風化による表面の摩耗が著しい。



第 16 図 出土石器

第3表 土器観察表(1)

No	グリッド 層位 遺構	器種 部位	形態・文様・技法等	色調 上：外面 下：内面	胎土 含有物
1	C3 SB01 ①⑥	深鉢 口縁～胴部	器形は円筒形を呈する。器厚は薄い。器面全体に半載竹管による平行沈線による区画。口縁部付近は横位に平行沈線を3条施し、上2条の間には縄文を施文後、沈線内側に鋸歯状に三角印刻が施される。下2条の間には、垂直方向に3対の橋状把手。胴部では方形の区画文が施される。また把手の直下には平行沈線による円形文が施され、円の左右には横位の長方形の区画文が、円の下部には縦位の長方形の区画文が施される。	7.5YR 4/2灰褐 7.5YR 5/3にぶい褐	雲母 砂礫
2	C3 SB01 ①	深鉢 胴部		7.5YR 4/2灰褐 7.5YR 5/4にぶい褐	雲母 砂礫
3	C3 SB01 ⑤	深鉢 口縁部	半円突起のある深鉢形土器の口縁部破片。半載竹管による平行沈線が円形に2重に施される。2つの円の間には格子状に線刻が施される。突起縁上には連続爪形文が施されている。器厚はやや厚い。	7.5YR 5/6明褐 7.5YR 5/8明褐	雲母
4	C3 SB01 覆土上半、①	深鉢 口縁部	半載竹管による平行沈線が横方向に3条。平行沈線間には縄文が施文。下2条の平行沈線間にはクサビ状印刻が横方向に連続して施される。器厚はやや厚い。	5YR 5/4にぶい赤褐 7.5YR 5/4にぶい褐	雲母
5	C3 SB01 ⑥、上半	深鉢 口縁部	半載竹管による平行沈線で区画文が施される。平行沈線の間には縄文が施文され、クサビ状印刻が施される。器厚は薄い。	10YR 5/4にぶい黄褐 10YR 5/4にぶい黄褐	粗砂
6	C3 SB01 上半	深鉢 口縁部	口縁部に、半載竹管による平行沈線が2条、横方向に施され、上位沈線の下部にクサビ状印刻が施される。器厚は薄い。	10YR 7/6明黄褐 10YR 6/6明黄褐	砂礫
7	C3 SB01 ⑤	深鉢 口縁部	半載竹管による平行沈線が横位に施され、その外側に刻みが施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 7/4にぶい橙 5YR 5/8明赤褐	雲母
8	C3 SB01 上半	浅鉢 口縁部	半載竹管による平行沈線が2条、横位に施され、沈線の外側にクサビ状印刻が施される。器厚は薄い。	7.5YR 6/6橙 7.5YR 6/6橙	砂礫
9	C3 SB01 ⑥	深鉢 口縁部	口縁端部に刻み。半載竹管による平行沈線が横位に2条施される。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄褐 10YR 6/4にぶい黄褐	粗砂
10	C3 SB01 一括	深鉢 口縁部	半載竹管による平行沈線が横位に、2条施され、沈線間には縄文が施文される。器厚は薄い。	10YR 4/2灰黄褐 10YR 6/4にぶい黄橙	雲母 粗砂
11	C3 SB01 ③⑥	深鉢 口縁部	口縁部に半載竹管による平行沈線が横方向に施される。口縁部直下に隆帯が横方向に貼り付けられ、隆帯上に半載竹管による押しき文が施されている。器厚は薄い。	7.5YR 4/4褐 7.5YR 5/3にぶい橙	粗砂
12	C3 SB01 下半	深鉢 口縁部	半載竹管による平行沈線が横位に施され、その上部に横位の三角刺突文が横位に連続して施される。器厚は薄い。	7.5YR 2/1黒 7.5YR 4/6褐	雲母 砂礫
13	C3 SB01 上半	深鉢 口縁部	水平方向に施された2条の隆帯上に、半載竹管による押しき文が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 6/6橙 7.5YR 6/6橙	赤色粒
14	C3 SB01 上半	深鉢 口縁部	口縁部は緩やかに外傾し、端部で垂直に立ち上がる。端部に刻みが施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 5/2灰褐 5YR 4/3にぶい赤褐	雲母 粗砂
15	C3 SB01 ②	深鉢 口縁部	キャリパー形を呈し、口縁部が外傾する。地文は櫛描きの格子文で隆帯の上に、半載竹管による押しき文が施される。口縁に作られた波状把手の内面には三角印刻が施されている。器厚はやや厚い。	10YR 4/1褐灰～ 10YR5/3にぶい黄褐 10YR 5/3にぶい黄褐	雲母 砂礫
16	C3 SB01 ①	深鉢 口縁部	器面全体に縄文施文。器厚はやや厚い。	10YR 5/3にぶい黄褐 10YR 3/2黒褐	雲母 赤色粒
17	C3 SB01 ②	深鉢 口縁部	器面全体に縄文施文。器厚はやや厚い。	10YR 4/2灰黄褐 2.5YR 4/3オリーブ褐	雲母
18	C3 SB01 上半	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線が横位に2条施された後、縄文施文。さらに平行沈線内側に鋸歯状のクサビ形印刻が施される。器厚はやや厚い。	10YR 5/4にぶい黄褐 5YR 5/6明赤褐	雲母
19	C3 SB01 一括	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線が水平方向に2条施された後、縄文施文。さらに平行沈線内側に鋸歯状の三角印刻が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 5/3にぶい褐 7.5YR 5/4にぶい褐	雲母 粗砂
20	C3 SB01 ⑥	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線が水平方向に2条施された後、縄文施文。さらに平行沈線内側に鋸歯状の三角印刻が施される。器厚は薄い。	7.5YR 7/4にぶい橙 7.5YR 6/3にぶい褐	砂礫
21	C3 SB01 ⑥、下半	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線が横位に2条施され、下部の平行沈線には円形に施された平行沈線が連結する。器厚は薄い。	10YR 6/4にぶい黄橙 10YR 7/4にぶい黄橙	雲母
22	C3 SB01 ④⑤、下半	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線で円形及び横方向に長方形の区画文が施される。長方形の区画文の左右両端は縦方向に隆帯が貼り付けられ、把手が作られている。平行沈線の外側にクサビ状印刻が施される場合もある。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄褐 10YR 4/2灰黄褐	粗砂 砂礫
23	C3 SB01 上半、下半	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線が渦巻き状に施される。平行沈線の間には縄文が施文。さらに平行沈線に平行して連続した印刻が施される。器厚はやや厚い。	10YR 5/3にぶい黄橙 10YR 6/4にぶい黄橙	雲母
24	C3 SB01 ⑤	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線で横方向に長方形の区画文を施し、その外側に連続した押しき刺突文が施される。器厚はやや厚い。	2.5Y 5/2暗灰黄 10YR 6/4にぶい黄橙	雲母 赤色粒
25	C3 SB01 上半	深鉢 胴部	半載竹管による平行沈線が円形に2重に施され、平行沈線の間には刻みが施される。器厚はやや厚い。	10YR 5/3にぶい黄橙 10YR 5/3にぶい黄橙	雲母
26	C3 SB01 ⑤	深鉢 胴部	半載竹管による4条の平行沈線が入り組むように施される。器厚は薄い。	10YR 4/2灰黄褐 10YR 6/3にぶい黄橙	雲母
27	C3 SB01 一括	深鉢 胴部	キャリパー形の器形を呈する。半載竹管による平行沈線で区画を施し、その内側を縦位に細い平行沈線が充填される。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄橙 10YR 6/4にぶい黄橙	雲母
28	C3 SB01 上半、下半	深鉢 口縁部	肩部で外側に折れ、口縁部に向けて立ち上がる器形を呈する。屈折部に、半載竹管による平行沈線で横方向に長方形の区画が施され、その内側に縄文が施文された後、区画を垂直方向に二分するように沈線が施される。器厚は厚い。	7.5YR 4/3褐 5YR 4/4にぶい赤褐	雲母

第4表 土器観察表(2)

No.	グリッド 層位 遺構	器種 部位	形態・文様・技法等	色調 上：外面 下：内面	胎土 含有物
29	C3 SB01 一括	深鉢 胴部	半截竹管による平行沈線が円形に二重に施され、平行沈線の間には半截竹管による押し刺突が施される。器厚は薄い。	2.5Y 7/3浅黄 2.5Y 6/3にぶい黄	雲母
30	C3 SB01 下半	深鉢	口縁部に向かってわずかに内湾する。外面には沈線が円形に三重に施され、内側にクサビ状の印刻が施される。器厚は薄い。	10YR 6/6明黄褐 10YR 5/6黄褐	雲母
31	C3 SB01 一括	深鉢	波状に施した刻みの上に隆帯を貼り付け、隆帯上に半截竹管による爪形文が施される。器厚は薄い。	7.5YR 7/4にぶい橙 10YR 6/3にぶい黄橙	
32	C3 SB01 ①	深鉢 頸部	胴部屈曲点に施された把手の外周に隆帯を貼り付け、隆帯上に半截竹管による押し刺突が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 6/4にぶい橙 7.5YR 6/4にぶい橙	雲母
33	C3 SB01 一括	深鉢	縄文施文後に、半截竹管による平行沈線が2条施される。ただしこれまでの沈線に比べると沈線は細く、浅い。器厚は薄い。	10YR 5/2灰黄褐 10YR 6/4にぶい黄橙	雲母 赤石
34	C3 SB01 ①	深鉢	半截竹管による平行沈線が縦位に2条施される。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄褐 10YR 5/2灰黄褐	粗砂
35	C3 SB01 ⑥	深鉢	半截竹管による平行沈線が円形に二重に施され、平行沈線の間には縄文が施文される。器厚はやや厚い。	7.5YR 5/3にぶい褐 7.5YR 5/8明褐	雲母
36	C3 SB01 ③⑥	深鉢	半截竹管の押し刺突による連弧文が横位に施され、その下位には半截竹管による平行沈線が横位に施されている。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄褐 10YR 5/3にぶい黄褐	粗砂
37	C3 SB01 ①、上半、排土	深鉢	垂直に立ち上がる器壁が外傾する器形を呈する。器面全体に縄文が施される。器厚はやや厚い。	10YR 3/2黒褐 10YR 4/2灰黄褐	雲母
38	C3 SB01 ⑥	深鉢 胴～底部	半截竹管による平行沈線で区画を作り、その間にランダムに平行沈線が施される。器厚は薄い。	2.5Y 2/1黒 2.5Y 2/1黒	雲母
39	C3 SB01 ②	深鉢 口縁～胴部	キャリパー形の器形を呈する。地文は節が長大な縄文。繊維質は認められない。地文の上に隆帯を水平方向に貼り付け、隆帯上に間隔の狭い連続爪形文が施される。口縁端部には僅かに隆起する突起が作られ、内外両側から施される連続爪形文の施文順序は、この突起を起点として内側と外側が交互に入れ替わる。くびれ上部では隆帯が波状に貼り付けられ、連続爪形文が施される。また内面口縁部にも縄文が施される。器厚は薄い。	7.5YR 6/6橙 7.5YR 6/6橙	粗砂
40	C3 SB01 ②	深鉢 口縁部	キャリパー形の器形を呈する。地文は節が長大な縄文。繊維質は認められない。地文の上に隆帯を水平方向に貼り付け、隆帯上に間隔の狭い連続爪形文が施される。口縁端部には内面側から連続爪形文が施された後、外面側からも連続爪形文を施している。内面口縁部にも縄文が施される。器厚は薄い。	10YR 7/3にぶい黄橙 10YR 7/4にぶい黄橙	粗砂
41	C3 SB01 上半	深鉢 口縁部	波状口縁の頂部直下に穴が開けられている。口唇部及び口縁部に連続爪形文が施され、穴の縁辺にも隆帯を貼り付け、連続刻みを施す。器厚はやや厚い。	2.5YR 6/6橙 7.5YR 5/4にぶい褐	
42	C3 SB01 ⑤	深鉢 口縁部	地文は節が長大な縄文。繊維質は認められない。地文の上に隆帯を水平方向に貼り付け、隆帯上に間隔の狭い連続爪形文が施される。内面口縁部にも縄文が施される。器厚は薄い。	7.5YR 6/4にぶい橙 7.5YR 7/4にぶい橙	粗砂
43	C3 SB01 上半	深鉢 口縁部	隆帯を水平方向に貼り付けた後、隆帯上に2段の連続爪形文が施されている。器厚は薄い。	10YR 6/4にぶい黄橙 10YR 6/4にぶい黄橙	粗砂
44	C3 SB01 一括	深鉢 頸部	キャリパー形土器の胴部から口縁部にかけての屈曲部。地文は縄文で、その上に隆帯を貼り付け、隆帯上に連続爪形文が施される。器厚はやや厚い。	10YR 6/4にぶい黄橙 7.5YR 7/6橙	
45	C3 SB01 ⑥	深鉢	器面全体に節が長大な縄文が施される。器厚は薄い。	7.5YR 6/4にぶい橙 7.5YR 6/6橙	
46	C3 SB01 ⑥	深鉢	器面全体に節が長大な縄文が施される。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄褐 10YR 5/4にぶい黄褐	
47	C3 SB01 ⑥	深鉢	器面全体に節が長大な縄文が施される。器厚は薄い。	7.5YR 6/6橙 2.5YR 5/3黄褐	
48	C3 SB01 下半	深鉢	器面全体に節が長大な縄文が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 7/6橙 7.5YR 7/4にぶい橙	
49	C3 SB01 一括	深鉢	地文は節が長大な縄文で、隆帯を貼り付けた上に貝殻端部で爪形文が施されている。器厚は薄い。	2.5YR 6/6橙 5YR 6/4黄褐	
50	C3 SB01 ③	深鉢 口縁部	折り返し端部。無文。器厚は薄い。	7.5YR 5/4にぶい褐 5YR 5/6明赤橙	粗砂
51	C3 SB01 ⑥	深鉢 胴部	半截竹管による平行沈線が横位に施される。器厚は厚い。	10YR 6/3にぶい黄橙 10YR 6/4にぶい黄橙	雲母
52	C3 SB01 上半	深鉢	半截竹管による平行沈線文が施されている。器厚はやや厚い。	10YR 4/4褐 10YR 5/4にぶい黄褐	粗砂
53	C3 SB01 上半	深鉢	半截竹管の押し刺突による間隔の広い連弧文が縦位に施されている。器厚は薄い。	10YR 5/1褐灰 10YR 6/3にぶい黄橙	雲母 粗砂
54	C3 SB01 下半	深鉢	半截竹管による平行沈線が横位に施され、その上位には縄文が、下位には刻みが施されている。器厚はやや厚い。	7.5YR 5/8明褐 5YR 6/8橙	雲母
55	C3 SB01 一括	深鉢	半截竹管による平行沈線文が施されている。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄褐 10YR 4/1褐灰	雲母 粗砂

第5表 土器観察表(3)

№	グリッド 層位 遺構	器種 部位	形態・文様・技法等	色調		胎土 含有物
				上：外面	下：内面	
56	C7D7 SB02 ①	深鉢 口縁部	胴部から口縁部にかけて緩やかに外湾する。器面全体に縄文が施文される。湾曲の屈曲点が剥落している。器厚は薄い。	10YR 6/4にぶい黄橙	10YR 5/2灰黄褐	雲母 砂礫
57	D7 SB02 ①	深鉢 口縁部	波状口縁で頂部直下に三叉文が施される。半截竹管による平行沈線が横位に施され、沈線間に縄文施文後三角印刻が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 6/6橙	10YR 6/1褐灰	雲母 赤色粒
58	C7 SB02 ①	深鉢 口縁部	半截竹管による平行沈線で方形の区画文を施し、区画内に格子状に沈線が施される。器厚はやや厚い。	5YR 5/6明赤褐	5YR 6/6橙	雲母 粗砂
59	C7D7 SB02 ①	深鉢 口縁部	口唇部には隆帯が貼り付けられ、肥大化する。半截竹管による平行沈線が施される。器厚は薄い。	7.5YR 6/4にぶい橙	7.5YR 6/4にぶい褐	雲母 粗砂
60	C7D7 SB02 ①	深鉢	半截竹管による平行沈線が円形に2重に施され、平行沈線の間に縄文が施文される。器厚はやや厚い。	10YR 7/3にぶい黄橙	7.5YR 7/4にぶい橙	雲母 赤色粒
61	D7 SB02 ②	深鉢	半截竹管による平行沈線で隅丸方形の区画文が形成される。器厚は薄い。	5YR 6/6/橙	7.5YR 7/6橙	赤色粒
62	C7D7 SB02 ①	深鉢	半截竹管による平行沈線で方形の区画文が形成される。器厚は薄い。	10YR 6/3にぶい黄橙	10YR 7/3にぶい黄橙	雲母 粗砂
63	C7D7 SB02 ①	深鉢	半截竹管による平行沈線で横方向に楕円形の区画文が施され、内部には縄文が施文される。器厚は薄い。	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/2灰褐	赤石 粗砂
64	C7D7 SB02 ①	深鉢	胴部から口縁部にかけて急角度で屈折する。屈折部の直下には隆帯が横位に貼り付けられ、隆帯上に半截竹管の押し引きによる連弧文が施される。器厚はやや厚い。	10YR 5/4にぶい黄橙	10YR 5/4にぶい黄橙	雲母 粗砂
65	C7D7 SB02 ①	深鉢 口縁部	キャリパー形を呈する土器の口縁部。地文は節が長大な縄文で、繊維質が認められる。口縁端部及び口縁外面に隆帯を横位に貼り付け、隆帯上に連続爪形文が施される。口縁端部の連続爪形文は外面から施した後、内面からも施している。連続爪形文の間隔はSB01で出土した土器に比べると、若干広い。口縁部内面にも縄文が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 6/4にぶい橙	7.5YR 5/4にぶい褐	雲母 粗砂
66	C7 SB02 ①	深鉢 口縁部	キャリパー形を呈する土器の口縁部。地文は節が長大な縄文で、繊維質が認められる。口縁端部及び口縁外面に隆帯を横位に貼り付け、隆帯上に連続爪形文が施される。口縁端部の連続爪形文は外面から施した後、内面からも施している。連続爪形文の間隔はSB01で出土した土器に比べると、若干広い。口縁部内面にも縄文が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 5/4にぶい橙	10YR 5/4にぶい黄褐	
67	C7 SB02 ①	浅鉢	半截竹管による平行沈線が水平方向に施され、その下位により細い沈線が格子状に施される。器厚は薄い。	5YR 6/6橙	5YR 6/6橙	雲母
68	C7D7 SB02 ①	深鉢	半截竹管による平行沈線が水平方向に施される。器厚は薄い。	7.5YR 5/4にぶい褐	10YR 6/4にぶい黄褐	雲母
69	C7 SB02 ①	深鉢	垂直方向に櫛描文が施される。器厚は薄い。	10YR 6/4にぶい黄橙	7.5YR 6/6橙	赤色粒
70	E5 SP60 覆土	深鉢	節の細かな縄文が施される。器厚は薄い。	10YR 5/3にぶい黄褐	10YR 5/4にぶい黄褐	雲母
71	B4 SX02 覆土	深鉢	半截竹管による平行沈線で方形の区画文を施し、区画内に縄文を施文後、細い半截竹管による刺突が施される。器厚は薄い。	10YR 4/4褐	10YR 4/4褐	雲母
72	B4 SX02 覆土	深鉢	半截竹管による平行沈線で区画文を施し、区画内に縄文を施文後、細い半截竹管による刺突が施される。器厚は薄い。	7.5YR 5/6明褐	7.5YR 5/4にぶい褐	雲母
73	B4 SX02 覆土	深鉢 底部	半截竹管による平行沈線で区画文を施し、沈線間に縄文を施文後、細い半截竹管による刺突が施される。器厚は薄い。	7.5YR 4/6褐	7.5YR 4/6褐	雲母 砂礫
74	B4 SX02 覆土	深鉢 底部	半截竹管による平行沈線を施し、沈線間に縄文を施文後、細い半截竹管による刺突が施される。器厚は薄い。	7.5YR 6/6橙	7.5YR 5/4にぶい褐	雲母 砂礫
75	B4 SX02 覆土	深鉢 底部	半截竹管による平行沈線を施し、その下位に細い半截竹管による刺突が施される。器厚は薄い。	5YR 5/6明赤褐	5YR 6/6橙	雲母 砂礫
76	B2 遺構外	深鉢 口縁部	波状口縁。口唇部に2条の連続爪形文を施し、その下位に無文帯、その下に連続爪形文を施している。波状口縁頂部内面には玉抱三叉文が施される。器厚は薄い。	10YR 5/2灰黄褐	10YR 6/3にぶい黄橙	雲母 粗砂
77	B2 遺構外	深鉢 口縁部	端部に刻みが連続して施され、口縁部内外面にはキャピラ文が施される。器厚はやや厚い。	7.5YR 4/1褐灰	7.5YR 4/3褐	雲母 粗砂

第6表 石器属性表

№	種別	器種	部位	出土位置			法量				備考
				出土区	遺構	層位	器高 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	
78	スクレイパー	頁岩	完形	C3	SB01	④	35.0	48.8	9.3	12.8	
79	スクレイパー	凝灰質頁岩	完形	C3	SB01	⑤	30.6	50.1	8.0	11.5	
80	スクレイパー	凝灰岩	完形	C4	SB01	一括	53.6	69.8	9.0	29.1	
81	石錐	安山岩	基部及び刃部の一部	C3	SB01	④	34.8	39.0	9.3	11.3	

V まとめ

1 遺物について

今回の調査では主に2基の竪穴状遺構から比較的まとまった土器群が出土した。

SB01から出土した土器群は、北裏C I式が主体をなし、主に近畿地方に分布する鷹島式土器が客体的に構成される。

これまで北裏C I式と鷹島式に後続する船元I式が共伴して出土した事例は、滋賀県粟津湖底遺跡（泉1988）をはじめとして報告されているが、北裏C I式と鷹島式が共伴して出土する事例は見つかっていない。

今回の調査では、両型式の出土層位に積極的に時間差を見出せるような偏りはなく、共伴事例として考えたい。このことからSB01の帰属時期は縄文時代中期初頭に位置付けられよう。

一方でSB02から出土した土器群は、北裏C I式が主体を成している点はSB01と変わらないが、鷹島式に後続する船元I式1期（泉2008）の土器が客体的に構成される。帰属時期はSB01と同じく縄文時代中期初頭であるが、船元I式1期の土器を伴っていることから、SB01より後に位置付けられる。

2 遺構について

今回の調査で検出した2基の竪穴状遺構について、敢えて「住居跡」という語を用いていない。昭和58年度に実施された調査で検出された住居跡は貼床が施され、柱穴とみられる小穴や、炉跡が検出されたが、本調査におけるSB01は、大きさこそ類似するものの、貼床や柱穴、炉跡などは検出されていない。またSB02については柱穴と考えられる小穴は検出できたものの、大きさの点から、住居跡と判断するのは難しいと考えたためである。

ただし昭和58年度調査における住居跡の帰属時期は中期中葉であり、時期差ゆえに住居の在り方に違いがあり、本調査における竪穴状遺構の性格も住居であった可能性は否定できない。

3 本調査地点の位置付け

今回の調査で検出された遺構は調査区北側から中央部にかけて主に分布し、南側は遺構の分布が希薄となる。広大な範囲を有する中原遺跡全体が調査されているわけではないので、断定することはできないが、このような遺構の平面分布から、本調査地点が中原遺跡の南限である蓋然性が高い。

また今回の調査地点は、出土土器から縄文時代中期初頭の間活動の痕跡が残されていることが明らかとなった。中原遺跡のこれまでの調査成果では、中期前葉（五領ヶ台式期）から中期後葉（曾利Ⅲ式期）の土器が出土しており、とりわけ昭和58年度に実施された

調査で検出されたSB01住居跡に伴う土器群は大畑C2式、船元Ⅱ式、勝坂式で構成されており、中期中葉に帰属するものと考えられている。今回の調査によって、本遺跡が立地する段丘面上における人間活動はわずかに遡ることになった。

当該期の人間の動態については、依然として不明な点が多いが、前述したように本調査で検出された竪穴状遺構については、住居跡の基本的な構成要素が検出されなかったことから、拠点集落における、ある程度長期間の居住を目的とした住居ではなく、一時的なキャンプサイトとしての機能を有していた可能性が高いと考える。これは出土遺物の中に石器類が少ないことも整合する。今後事例が蓄積されることで、当該期の人間動態が明らかになることを期待したい。

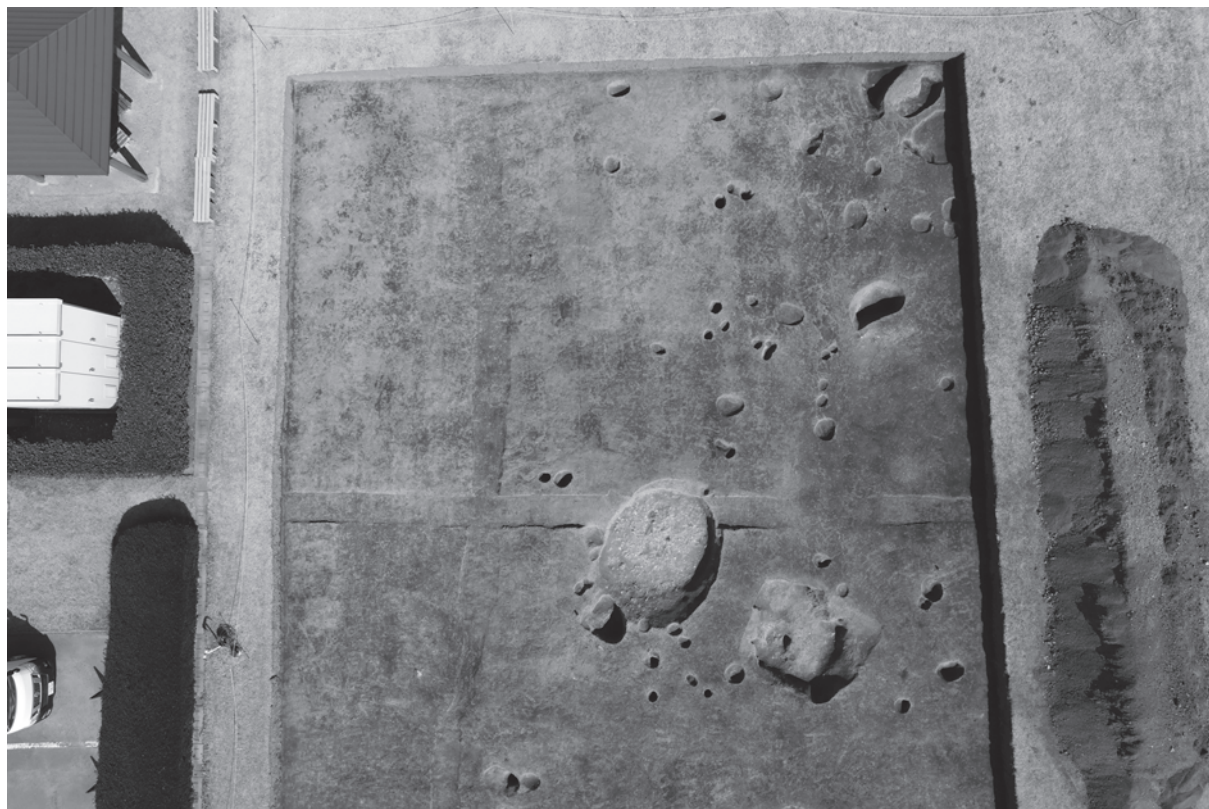
4 おわりに

本報告書では、他者による検証が可能になることを重視し、限られた紙幅の中で可能な限りわかりやすくなるよう努めた。県内の当該期資料の検出例も極めて少ないこともあり、資料の増加と調査方法の深化を待ち、隣接する地域を含めた全体的な視座からの再検討が必要であろう。その際の一資料として本報告書が役立てば、調査者の目的は達成される。しかしながら、調査者の能力不足により、その意図に反して分かりにくい部分や方法上の欠陥については、諸賢の意見を仰ぎたい。

引用参考文献

- 掛川市教育委員会 1984『中原遺跡発掘調査報告書』
- 泉拓良 1988「船元・里木土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』pp.307-310 小学館
- 掛川市教育委員会 1988『中原遺跡発掘調査報告書』
- 増子康眞 1998「東海地方縄文中期前半土器群の研究史と課題—北屋敷Ⅰ式から北屋敷Ⅱ土器へ—」『縄文時代中期前半の東海系土器群 北屋敷式土器の成立と展開 予稿集』pp.1-5 静岡県考古学会
- 松井一明 1998「静岡県中西部の中期前半東海系土器群(1)—大畑C2式土器とその前後—」『縄文時代中期前半の東海系土器群 北屋敷式土器の成立と展開 予稿集』pp.41-49 静岡県考古学会
- 松本一男 1998「静岡県中西部の中期前半東海系土器群(2)—大畑C2式から北屋敷式の成立まで—」『縄文時代中期前半の東海系土器群 北屋敷式土器の成立と展開 予稿集』pp.50-56 静岡県考古学会
- 申原村教育委員会 2003『閑羅瀬遺跡発掘調査概報』
- 泉拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式」『総覧 縄文土器』pp.502-509 『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 増子康眞 2008「北裏C～北屋敷Ⅱ式土器」『総覧 縄文土器』pp.486-493 『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 掛川市教育委員会 2020『林遺跡第7次発掘調査報告書』
- 掛川市文化・スポーツ振興課 2021『吉岡下ノ段遺跡第16次発掘調査報告書』

写真図版



完掘状況 1

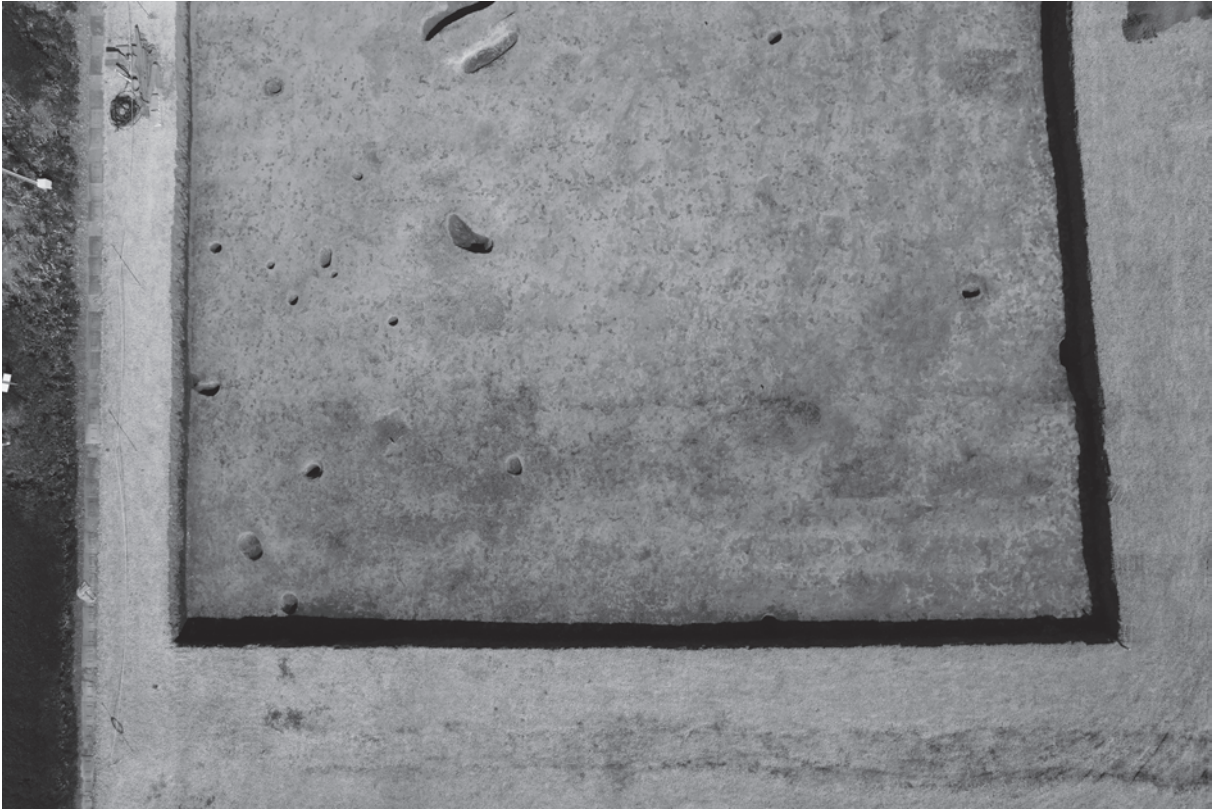


完掘状況 2

写真図版 2



完掘状況 3



完掘状況 4

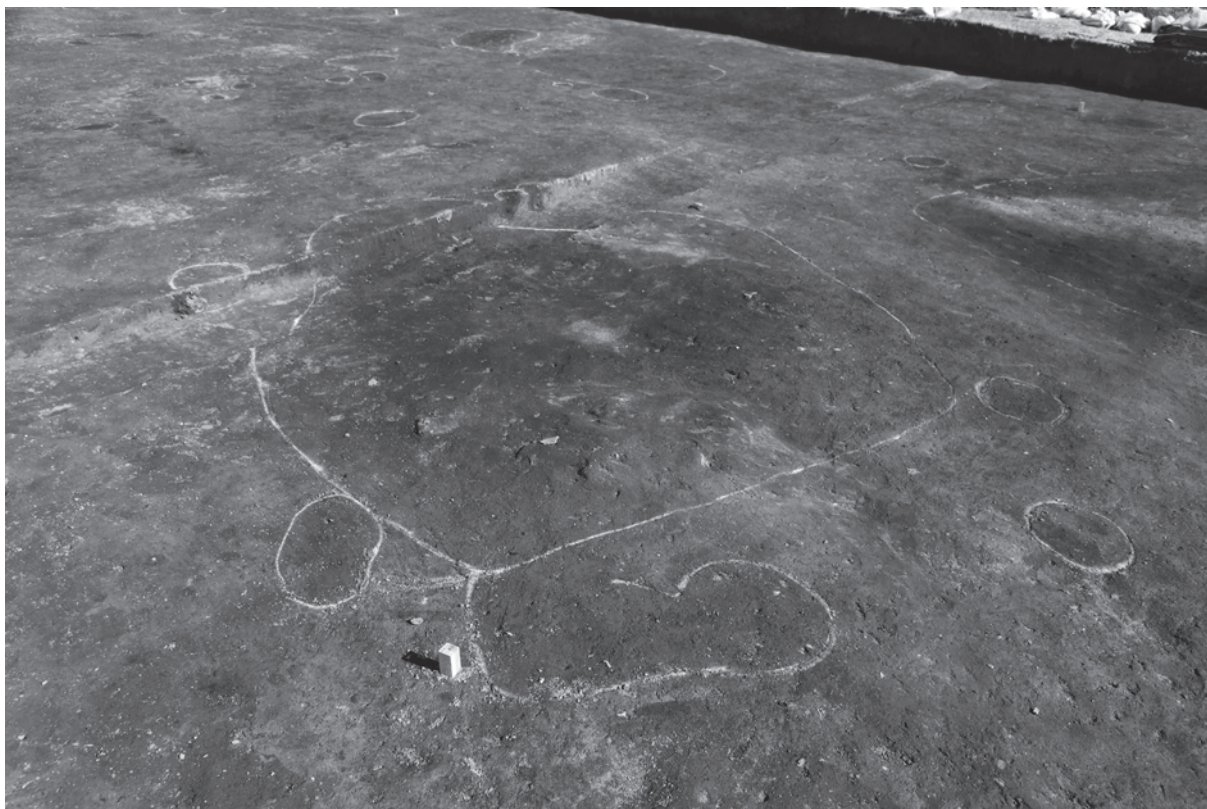


調査前風景（南から）



基本層序（調査区西壁）

写真図版 4



SB01 検出状況 (南西から)



SB01 土層断面 (西から)



SB01 土層断面（北から）



SB01 遺物出土状況（北西から）

写真図版 6



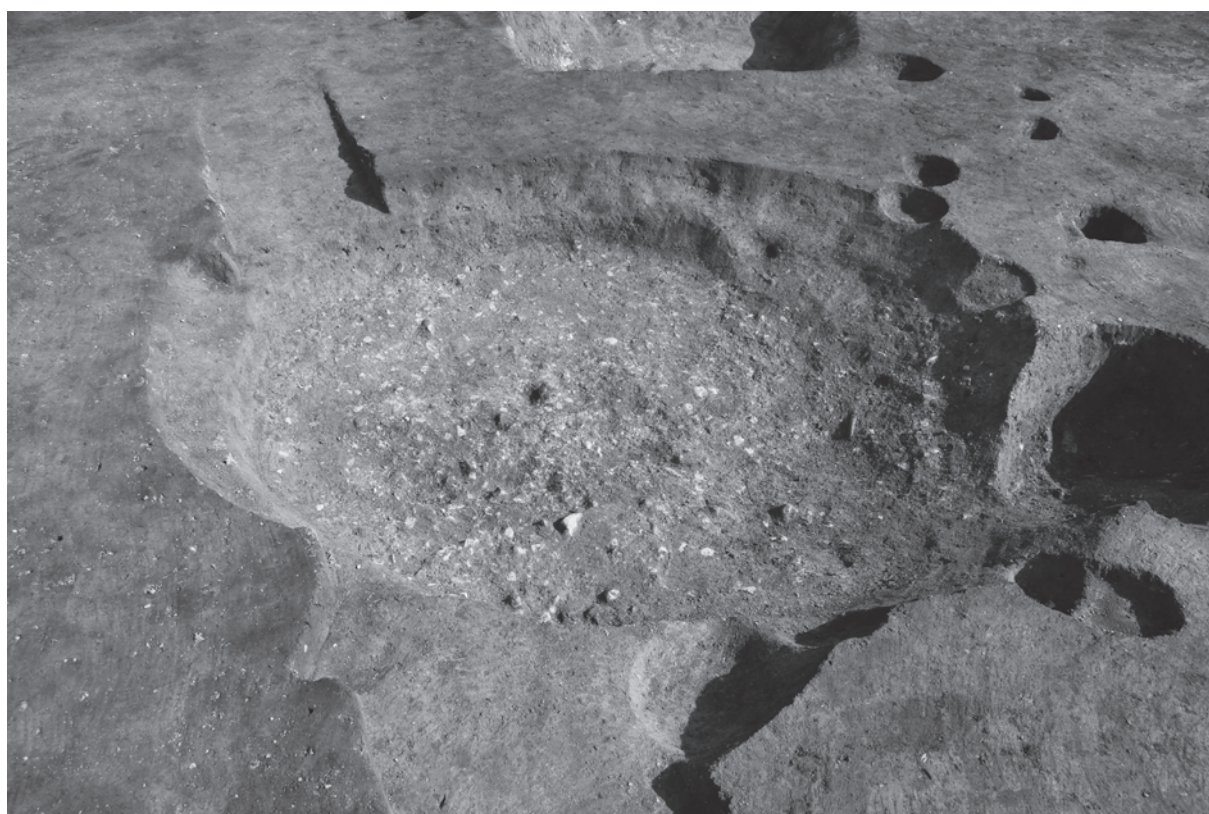
SB01 遺物 No. 1 及び 2 出土状況 (北西から)



SB01 遺物 No.39 出土状況 (西から)



SB01 遺物 No.39 及び 45 出土状況（西から）



SB01 完掘状況（北西から）



SB02 検出状況（南東から）



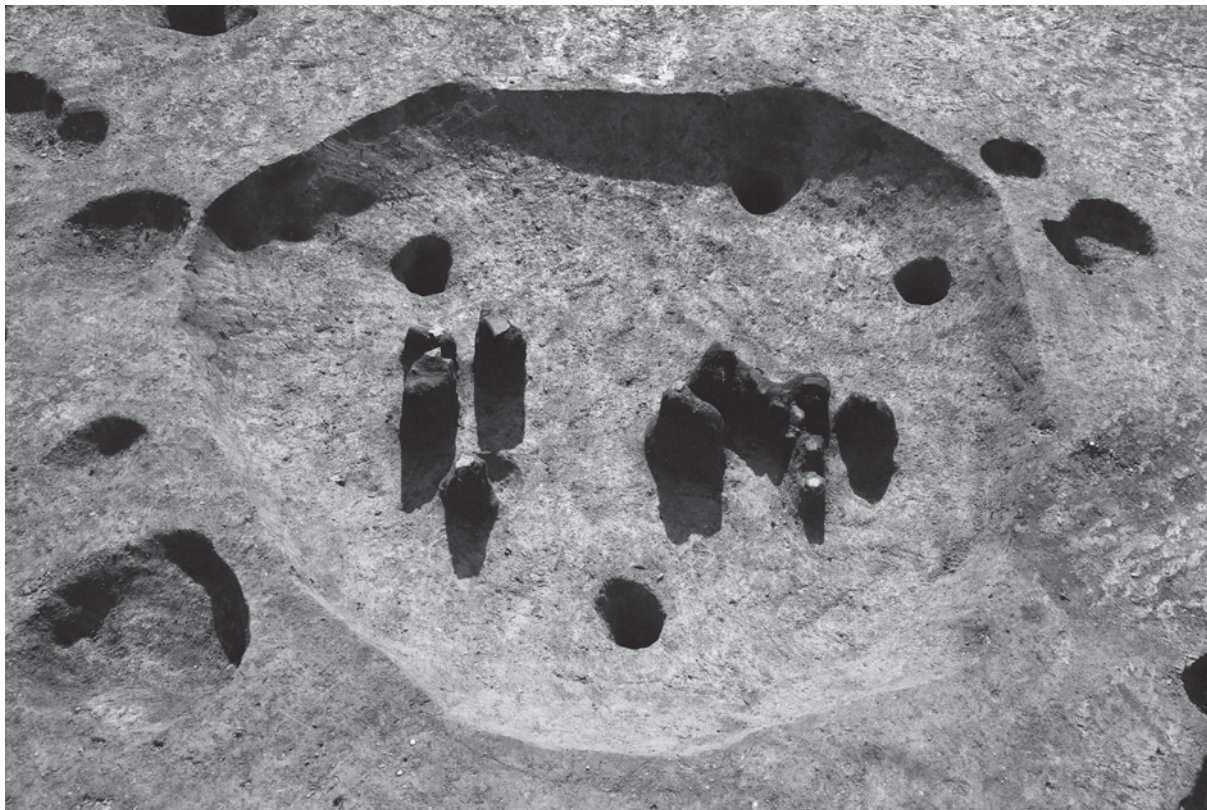
SB02 土層断面（南から）



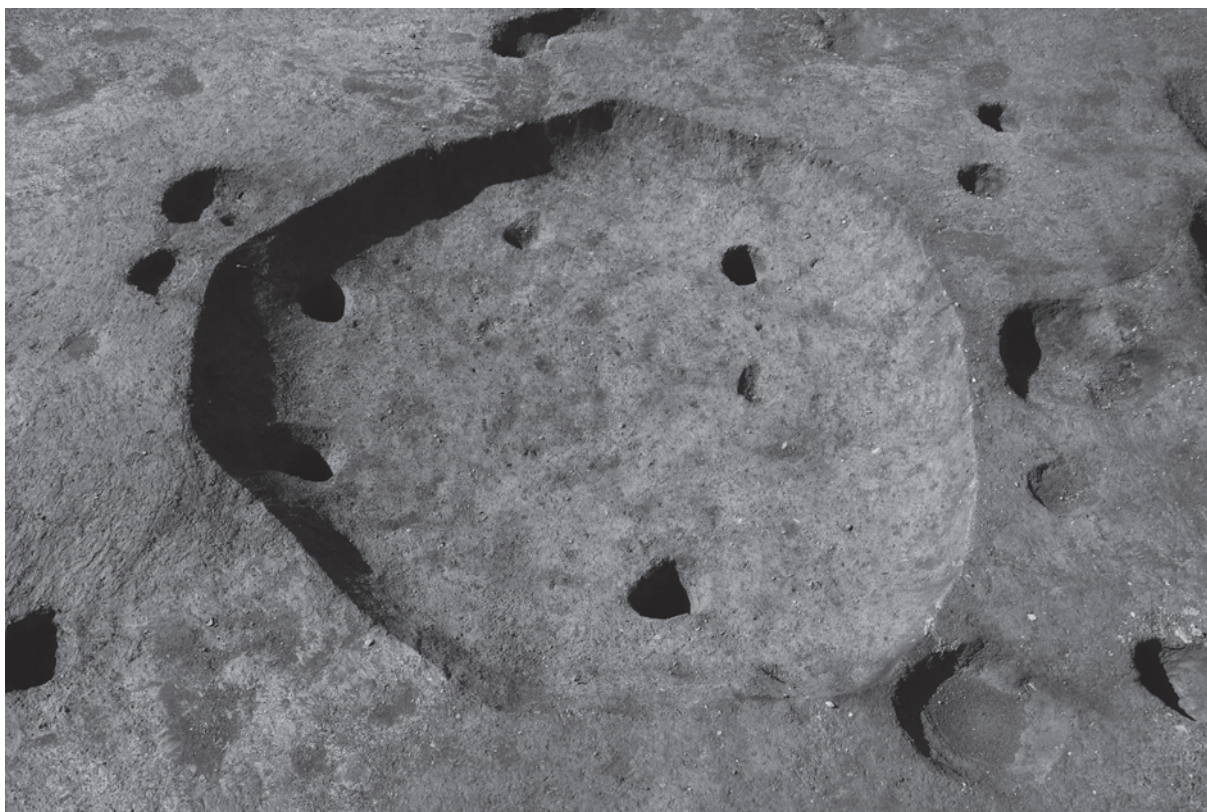
SB02 土層断面（西から）



SB02 遺物出土状況（東から）



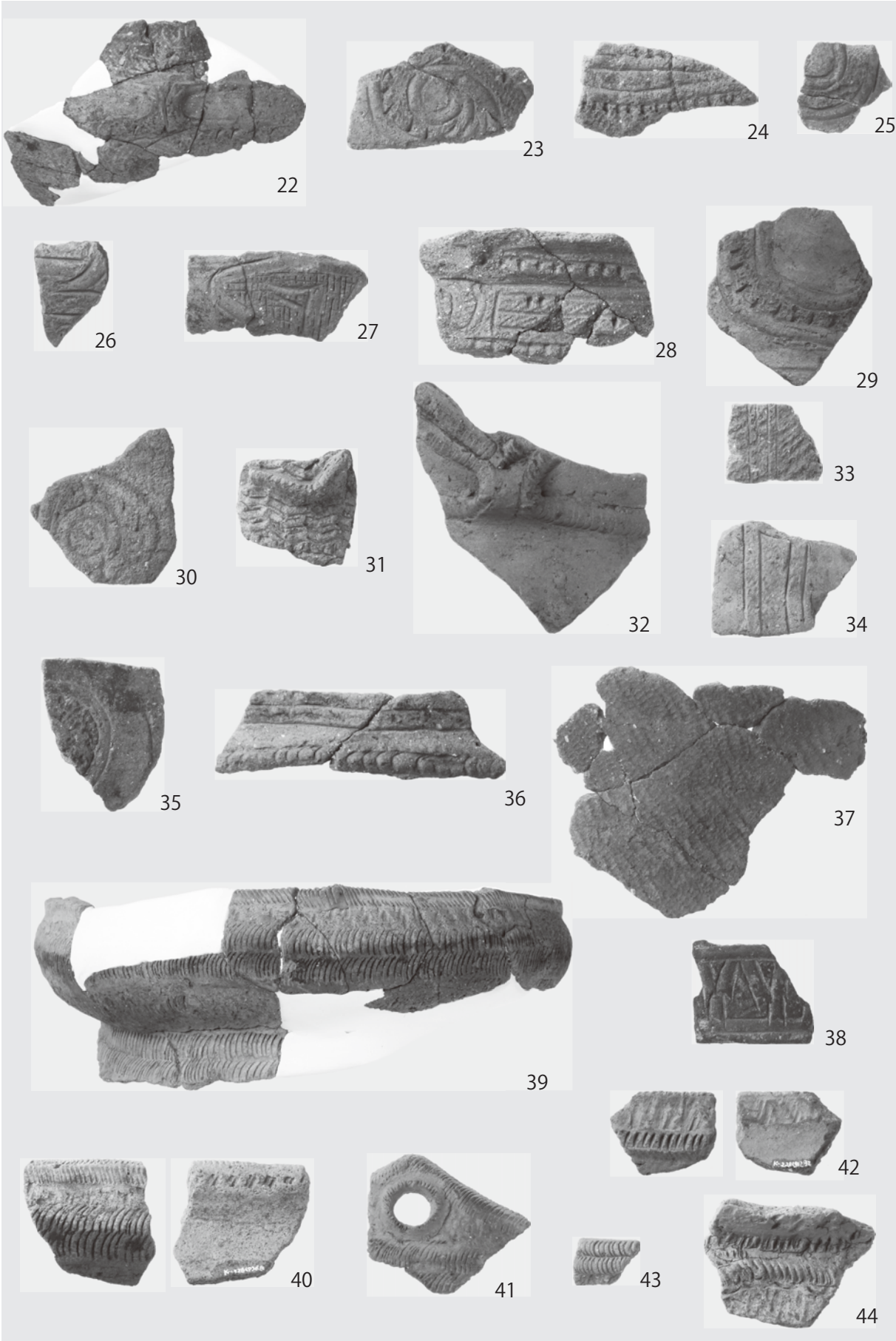
SBO2 遺物出土状況（北西から）

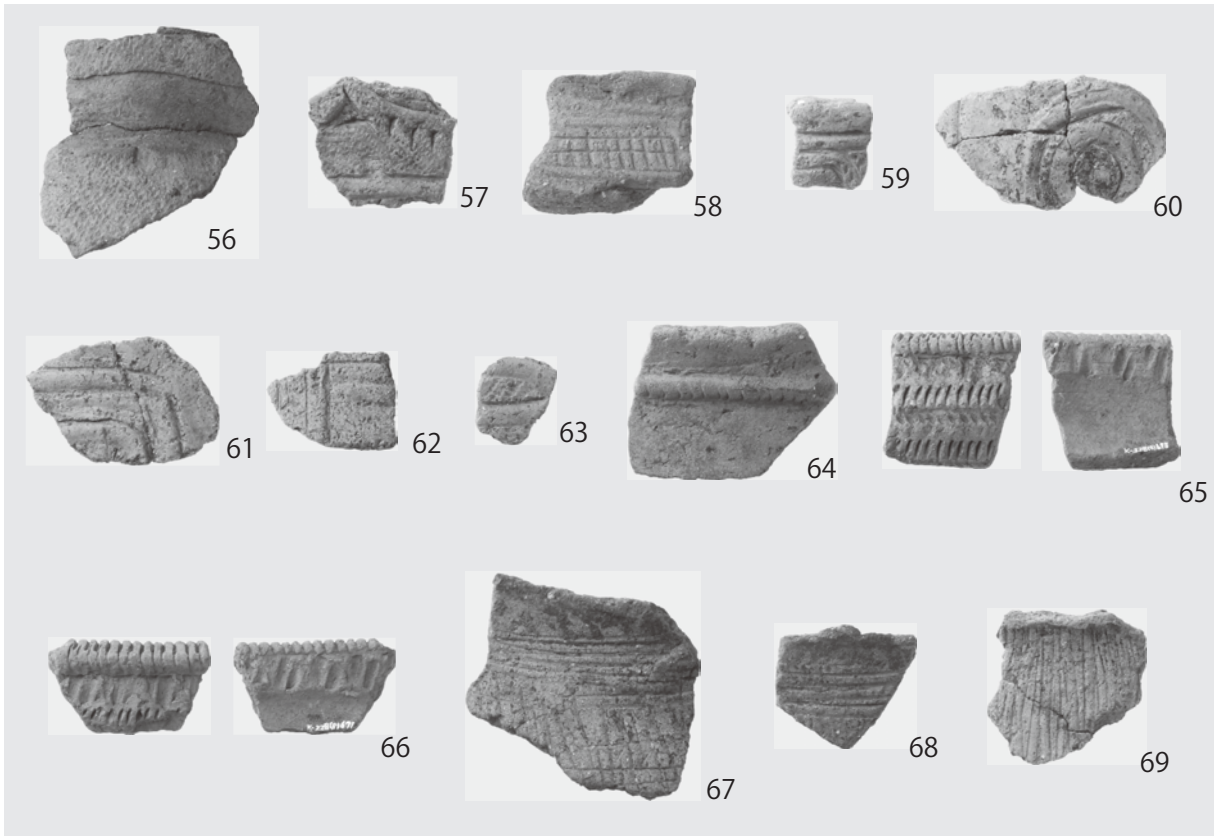
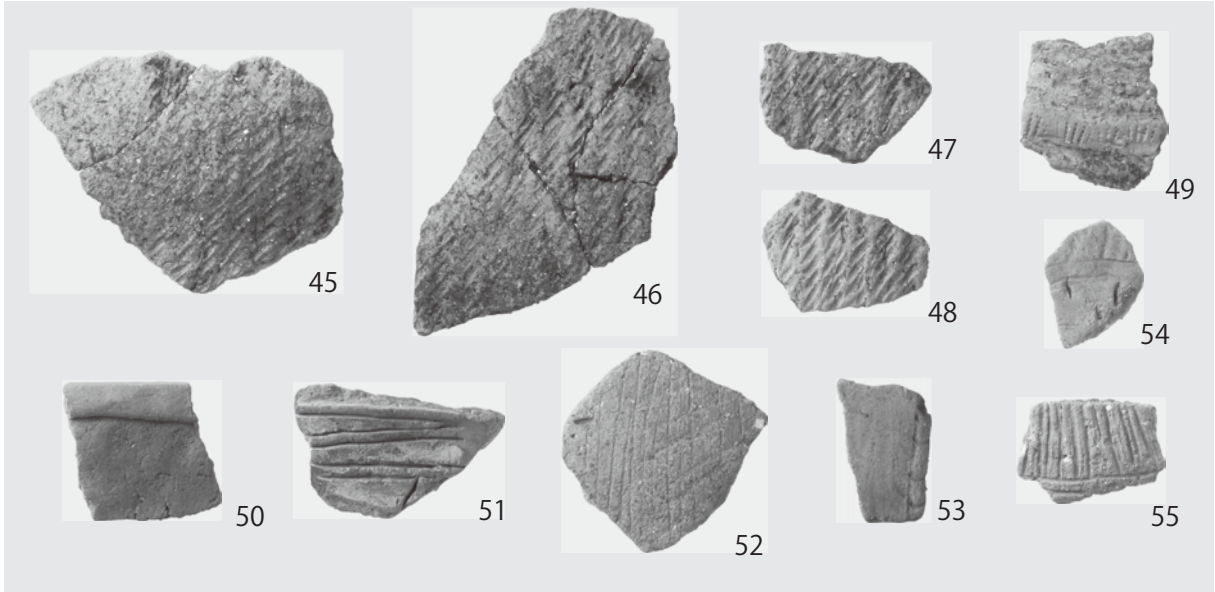


SBO2 完掘状況（東から）



写真图版 12





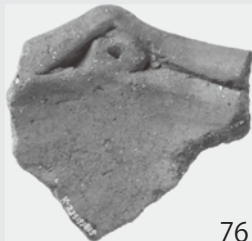
写真図版 14



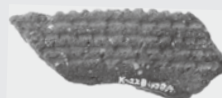
74



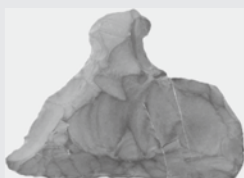
75



76



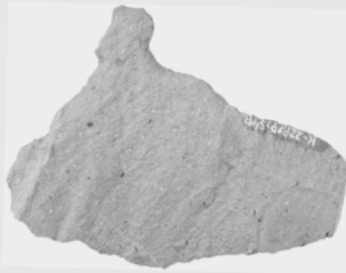
77



78



79



80



81

報告書抄録

ふりがな	なかはらいせきだい9じはっかつちょうさほうこくしょ							
書名	中原遺跡第9次発掘調査報告書							
編著者名	夏目不比等、村田弘之							
編集機関	掛川市文化・スポーツ振興課 株式会社フジヤマ							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷1-1-1 電話0537-21-1158 (掛川市文化・スポーツ振興課) 〒435-0013 静岡県浜松市東区天竜川町303-6 電話053-462-8800 (株式会社フジヤマ)							
発行機関	掛川市							
発行年月日	令和4年(2022年) 2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかはら 中原遺跡	しずおかけんかかけがわしたかだ 静岡県掛川市高田	22213	228	34度 47分 43秒	137度 56分 36秒	2020年(令和2年) 11月27日 ～ 2021年(令和3年) 2月25日	1,360㎡	研修 施設 建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落	縄文時代中期	竪穴状遺構 土坑 小穴		土器、石器		五領ヶ台式の影響を受けた北裏C I式土器と、関西系の鷹島式土 器が同遺構内から共伴して出土		

中原遺跡第9次発掘調査報告書

令和4年(2022年)2月28日

発行 掛川市

印刷 中部印刷株式会社